Société Franco-Japonaise d'Orthopédie 日仏整形外科学会

INFOS

日仏整形外科学会広報誌 アンフォ

■名誉会長……七川歓次
Président d'honneur —— K. SHITIKAWA
■会長……小野村敏信
Président —— T. ONOMURA
■副会長……小林　晶
Vice-Président —— A. KOBAYASHI
■書記長……瀬本喜啓
Secrétaire général —— Y. SEMOTO
■書記·会計……大橋弘嗣
Secrétaire et Tréscrier — H. OHASHI
弓削　至　青木　清　藤原憲太
I. YUGE　K. AOKI　K. FUJIWARA
■幹事……坂巻豊教　金子和夫　安永裕司
Membre exécutif —— T. SAKAMAKI　K. KANEKO　Y. YASUNAGA

■事務局：〒 530-0012　大阪市北区芝田 2 − 10 − 39　大阪府済生会中津病院内（係：大橋弘嗣）
Tel.（06）6372-0333　Fax.（06）6372-0339
Bureau : Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON
■発行所：〒 530-0012　大阪市北区芝田 2 − 10 − 39　大阪府済生会中津病院（編集者：大橋弘嗣）
Tel.（06）6372-0333　Fax.（06）6372-0339
Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON（Éditeur : H. OHASHI）
■ホームページアドレス：http://www.sofjo.gr.jp

2008.4.1
VOL. 18

[巻頭言]

第9回日仏整形外科合同会議のご報告

第9回日仏整形外科合同会議 9éme Réunion de l'Association France Japon d'Orthopédie（AFJO）は2007年9月14、15の両日、Niceで行われました。会長はJacques Caton先生です。ご存知のようにこの会議は二年に一度、日仏両国が交代で行うことになっており、フランスではこれまでParisで2回、次いでLyon、Grenobleで行われてきました。一昨年、京都で開かれた第8回会議（瀬本喜啓会長）の役員会の席で次のフランスでの開催地をどこにするかの話が出たときに、日本側からこれまで行われていない場所たとえばNiceという希望を出しました。Caton先生はLyonの方ですが、日本側の要望を容れていただいて今回のNiceでの開催となったわけです。日本からは同伴者も含めて約80名の参加があり、これはこれまでの最多であったと思います。美しい街、紺碧の海，好天にも恵まれ、学会の背景としては申し分のない環境でした。

会議の模様を行われた行事の順に振り返って見ますと、学術集会前日の13日にはフランス側の招待によるサン・ポール・ドゥ・ヴァンスへのオフィシャル・バス・ツアーがありました。まずサン・ポール・ドゥ・ヴァンス近郊のマーグ財団美術館に立ち寄りましたが、ここにはミロ、シャガール、マティスなどの数多くの作品が素晴らしい環境の中で展示されています。Caton先生自らが案内役として作者と作品について熱心に説明をされましたが、その造詣の深さと情熱には恐れ入りました。そのあと坂道を辿りながら訪れたサン・ポール・ドゥ・ヴァンスは、小高い丘の上に街が乗っているという典型的な“鷲の巣村”です。曲がり

小野村　敏信

くねって入り組んだ石造りの小道と家並みを尋ねる散策は、古いフランスの田舎町の雰囲気を堪能させてくれました。

その日の夕方にウェルカムパーティーがありました。場所はニースの海岸沿いの大通りプロムナード・デザングレに沿う学会指定のホテル、Four Points Sheraton/Elysee Palaceの屋上のテラスです。いつものことながらフランス流で形式張ったことは何も無く、地中海の爽やかな風に吹かれて海岸の夕景夜景を楽しみながら、三々五々と集まって再会を喜び旧交を温めました。

14日から学術会議が始まりました。場所はやはり海岸通りに沿う小児病院Fondation Lenval Nice病院の講堂で、ロビーからはニースの海岸を見渡すことのできる素晴らしい会場です。まずフランス側の歓迎の挨拶のあと、午前8時から学術プログラムが始まりました。今回は学会の主題としてPediatric Orthopedics, Scoliosis, OA of the Knee Joint, Hip and Knee Surgeryの4つを挙げて演題募集されましたが、応募は日本から41題、フランス側から28題、計69題という過去に例を見ない多さで、一会場で一日半という時間に収まるかどうか心配でした。しかし、欠演がほとんどなかったにもかかわらず、一杯一杯ではありましたがほぼ予定どおりに進行しました。第一日目の主題は股関節とTHA、膝関節とTKA、小児整形と脊椎外科、外傷と手・上肢、の問題、二日目は再び股関節とその他の問題でした。内容別に分類しますと成人の股関節に関するものがTHAも含めて25題と最も多く、次いで膝関節とTKAが12題、手を含む上肢が9題、脊椎と足が各4題、先天股脱と側彎症が各3題、小児疾患と腫瘍が各2題、その他となります。このうち脊椎と先天股脱についての発表はすべて日本からのものでした。司会、口演、質疑応答は主として英語でしたが、ほぼすべての発表に対して活発な討論がありました。個々の演題や討論の詳細までご紹介はできませんが、レベルの高い内容の発表が多かったことが嬉しく、これによって日本とフランスの両国の整形外科における最近の努力と主要な問題点をお互いに知ることができたと思います。

第一日の晩に学会主催、全員参加のガラ・パーティーが前記のホテルで行われ、素晴らしい料理とワインを楽しみながら、活発な会話と交歓が深夜まで続きました。

振り返ってみますと1990年にパリで行われた第1回のAFJO以来、この会合は定期的に開かれて今日に至っており、少しずつではありますが着実にその内容を充実させてきました。またほとんど同じ時期に始まった青年整形外科医の交換研修も、いろいろと困難な事情を抱えながら続けられ、大きな成果を得ています。東西に遠く隔たり、言語も風習も異なる二つの国の整形外科が、このように長いお付き合いを続けてきたということは、お互いになにか惹かれるものの上に双方の努力が積み重ねられてきたということでしょう。医療環境が年毎に厳しくなる中にあって、日本側のSOFJOの会員ならびに関係諸団体の皆様の変わらぬご支援に感謝しています。

今回の学会がとくに盛り上がったのは、ニースの土地柄とCaton先生を中心としたフランス側のご努力によることは勿論ですが、七川名誉会長をはじめ多数の日本の方々のご参加が得られたこと、いつものことながら本会の連絡員でリオン在住のジラン恵子さんのご支援によるところが大きいと、この場を借りてこれらの方々にお礼申し上げます。

次回は2年後の2009年に大橋弘嗣先生を会長として日本で行われることになります。今回の会期中に行われたビジネスミーティングの席で、次回の開催地について日本側がが考えていたいくつかの候補地（北海道、箱根・・・沖縄）を挙げたのですが、沖縄の名が出た途端にフランス側委員は全員一致で“オキナワー！”。そのようになりそうです。会期は5月下旬頃を中心に検討されていますが、是非とも沢山の方にご参加いただいて会を盛り上げていただきますようお願いします。

第９回 AFJOに参加して

南仏コート・ダ・ジュール、ニースに魅せられて

2007年9月14、15日にフランス・ニースで開催された第9回AFJOに参加致しました。

南仏コート・ダ・ジュール、ニースでの開催に魅惑され、AFJOは日本での開催も含めて初参加でしたが、

演題も無事にacceptしていただきましたので、大手を振って参加することができました。

フランスからも今回学会長のCaton先生以下多くの先生が参会され、活発な質疑応答がなされました。演題は関節疾患、小児整形領域の発表が多く、参会者の専門領域が伺えました。

学会前日にはサン・ポール・ヴァンスへのオフィシャルツアーが組まれ、Caton先生自らバスの最前列に陣取られて、マイクで様々な案内をして下さりました。マーグ財団美術館ではチャーミングな女性学芸員の大変熱心な説明を聞きながら、ミロやジャコメッティなどの現代美術を楽しみました。その後、16−17世紀の町並みが保存されているサン・ポールへ移動致しましたが、七川先生も我々と同様に坂道を上がり降りしておりましたので、日本の事務局担当の大橋先生も心配されて、七川先生の後姿を確認しながら歩いておりました。しかし暑い日差しの中、運動不足の我々はすっかり七川先生に遅れてしまい、自らが目的地にたどり着くのがやっとの有様で、先生のご健脚振りには恐れ入りました。小高い丘の上にあるサン・ポール村到着後はすぐにカフェに入り、冷たいプロヴァンスワインで生き返る思いを致しました。

松戸市立病院　整形外科　飯　田　　哲

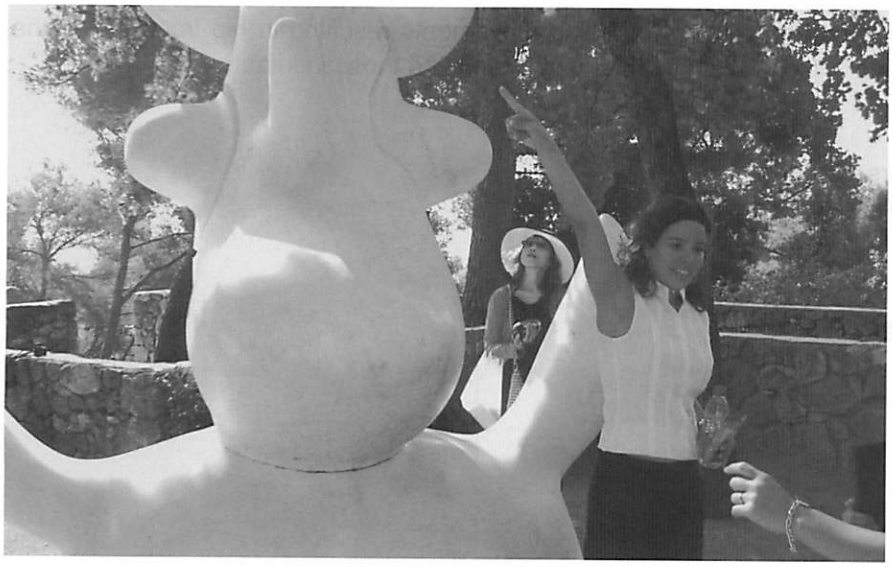
学会は地中海に面するブロムナード・デザングレ通り沿いに立つ、ランブル病院で行われました。小児病院らしく受付にはかわいいぬいぐるみ等が置いておりました。フランスでは小児整形は整形外科ではなく、小児外科医が担当するとの事で、日本とは大分事情が異なるようです。学会場に隣接するフロアーからは地中海が見渡せ、ランチはコバルトブルーの海を眺めながら、プロヴァンスワインを傾けました。それも、赤・白・ロゼと揃い、ブイヤベースあり、最後にはチーズも出てくる充実ぶりで、ランチタイムが2時間近くあるのにも頷けました。

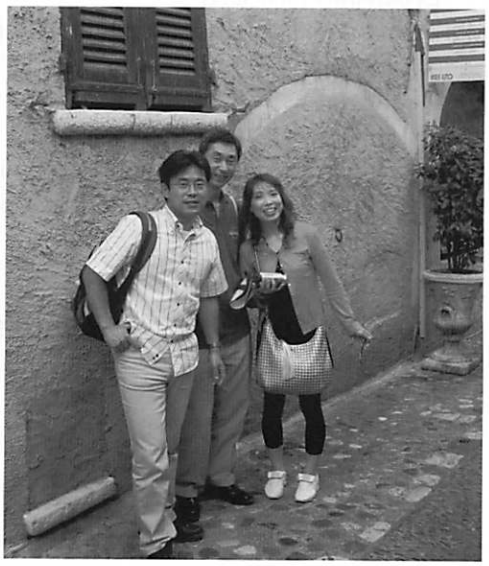
学会前日はホテル屋上のプールサイドでニースの暮れ行く空を眺めながらのWelcome partyが催されました。学会初日の夜にはGala dinnerと、よく学び、よく楽しむお国柄が伺えました。Gala dinnerでは日本を代表され、小野村先生がご挨拶をされましたが、ユーモラスと情緒あふれるお話しで本会が大きな距離を越えて長く継続している理由が伺われました。海外の先生だけでなく、普段お話出来ない日本の先生方ともリラックスしてお話しすることができ、これも海外での学会の一つのメリットかと思います。

日本からは奥様や小さなお子様を同伴しての参加も多く、このことはCaton先生も大変喜んでおられました。

次回2年後は日本での開催ですが、フランスの先生方からは沖縄の人気が高いようで、次回会長の大橋先生は早速沖縄下見の計画にお忙しくなりそうです。

日本からの参加者も皆さん無事に帰国されたようで、organizeしていただいたCaton先生はじめフランス側の先生方、宿泊・通訳に大変お世話になりましたジラン敬子さんにこの場を借りて御礼申し上げます。





VENDREDI 14 SEPTEMBRE 2007
FRIDAY 14, SEPTEMBER 2007

7h30 – 7h45 Accueil / Welcome

7h45 – 8h00 Introduction (JC + Kubo + AFJO Japon)

8h00 – 10h00 Hip and THA

P. TRACOL (CAVAILLON – FRANCE)
Navigation acetabular anatomic study – Application in the development of new implant.

M. BASSO (GIENS – FRANCE)
Chirurgie mini invasive de hanche : 50 ASIA versus 50 mini Post : résultats préliminaires sur l'évolution à court terme.

K. UESHIMA (JAPON)
Relationship between acetabular labrum evaluation by using radial magnetic resonance imaging and progressive joint space narrowing in mild hip dysplasia

JL DORE (TOURS – FRANCE)
Comment calculer l'inclinaison du cotyle à donner en per-opératoire.

H. TERAYAMA (JAPON)
Mid-term results of the thrust plate hip prosthesis bone-preserving prosthesis with a single axis

J. AEBI (MONTAUBAN – FRANCE)
Complications comparées des 80 premiers cas de 2 voies d'abord PTH : Watson-jones modifiée versus MIS-2 de Berger.

T. YAMAKAWA (JAPON)
Histological findings about the localization of osteoclasts and active osteoblasts in osteorarthrotic subchondral bone cysts of femoral heads.

J AEBI (MONTAUBAN – FRANCE)
Voie d'abord antéro-latérale de type Watson-Jones modifiée, sans section musculaire. A propos des 100 premiers cas.

K. OINUMA (JAPON)
Simultaneous bilateral total hip arthroplasty using a mini-incision direct anterior approach

K. KAMIKAWA (JAPON)
15-year follow-up study of total hip arthroplasty with acetabular bone-grafting for dysplastic hip

H. KOMURO (JAPON)
Development of a new hip protector – reconstruction of falling movements resulting in hip fractures on the elderly by examining those in infants

10h00 – 10h30 Pause / Coffee Break

10h30 – 12h30 ONA - TKA

S. IIDA (JAPON)
Development and localization of steroid-induced osteonecrosis in the hip and the knee joint-A prospective MRI study-

T. YAMASAKI (JAPON)
Transplantation of bone marrow-derived mononuclear cells for osteonecrosis of the femoral head

F. BORRIONE (MARSEILLE – FRANCE)
TKA and sports

T. KUROZUMI, CH.CUNY, M. IRRAZI
The telegraph nail for antegrade nailing of proximal humerus fractures. 78 cases at four years.

S. LUSTIG (LYON – FRANCE)
Results of 262 consecutive unicompartimental knee arthroplasties performed between 1987 and 2006.

M. CAMELI (TOULON – FRANCE)
Results of unicompartimental knee arthroplasty in a series of 500 implantations with a minimum follow up of 5 years.

T. OSANAI (JAPON)
Histological examination of Leeds-Keio artificial ligament 3 years after implant to the surface of tumor endoprosthesis : two cases

S. LUSTIG (LYON – FRANCE)
Management of ligament instabilities in the second revision TKA. Must we always use a hinge model ?

M. SATO (JAPON)
Application of compression stockings to prevent deep veinous thrombosis after total knees arthroplasty – Undersized stockings affect on markers of coagulation/fibrinolytic system

T. TSUBOYAMA (JAPON)
Health-related quality of life among survivors of lower extremity sarcomas.

12h30 -14h00 Déjeuner / Lunch

14h00 – 16h00 Ortho. Pediatric Orthopaedic Surgery – Spine Surgery

M. FUJIWARA (JAPON)
A case of congenital sensory neuropathy with anhydrosis

K. AOKI (JAPON)
Open reduction including circumferential capsulotomy and iliopsoas anterolateral transfer-strategy to treat hip dislocation in Kabuki syndrome

S. YAMAMOTO (JAPON)
Mid-term results of Chiari pelvic osteotomy in patients with developmental dysplasia of the hip

T. SAKAMAKI (JAPON)
Closed reduction following horizontal traction for DDH after the walking age

JL. CLEMENT (NICE – FRANCE)
Thoracic pedicle screw insertion technique ins scoliosis

Y.SEMOTO (JAPON)
Effectiveness of thoracoscopic anterior release for scoliosis

G. BOLLINI (MARSEILLE – FRANCE)
Desepiphyseodesis : clinical and experimental datas.

JL. CLEMENT (NICE – FRANCE)
Restoration of thoracic kyphosis in adolescent idiopathic scoliosis. Comparative analysis of two methods of reduction: Cantilever reduction vs two rods simultaneous translation

G. BOLLINI (MARSEILLE – FRANCE)
Malignant bone sarcoma of the spine in children, A series of 9 patients.

Y.SHIMAMURA (JAPON)
Effectiveness of microendoscopic fenestration for lumbar spinal canal stenosis in elderly patients : Surgical technique and outcome

A. KIN (JAPON)
Anterior cervical fusion using a cylindrical threaded titanium cage and b-tricalcium phosphate granules

T. NAKAJIMA (JAPON)
An evaluation of perioperative anticoagulant therapy in spinal surgery

16h00 – 16h30 Pause / Coffee Break

16h30 – 18h40 Traumatology hand and superior limb

M. YASUMA (JAPON)
Technical advices and pit-falls about locking compression plates in fracture surgery

K. KIKUCHI (JAPON)
Thee-dimensional analysis of trabecular bone structure of human vertebra in vivo using image data from multi-detector row computed tomography – correlation with bone mineral density and ability to discriminate women with vertebral fractures.

M. SCARLAT (TOULON – FRANCE)
Revision Arthroplasty in the Pos-traumatic Shoulder

P. LIVERNEAUX (PARIS – FRANCE)
Is the computer-assisted surgery useful for total wrist prosthesis ?

M. HONJO (JAPON)
Dorsal double-plating fixation for unstable intra-articular fracture of the distal radius.

N. TAKIGAWA (JAPON)
Clinical result of concomitant ipsilateral fracture of the humerus and forearm

M.OKAMOTO (JAPON)
Complications of volar plating for distal radius fracture : is plate removal necessary ?

P. LIVERNEAUX (PARIS – FRANCE)
A prospective randomised trial to compare violar locking plates with versus without calcium phosphate cement in osteopporotic distal radius fractures.

M. SCARLAT (TOULON – FRANCE)
Results of the Open or arthroscopic debridment for irreparable tears of the rotator cuff in Elderly – Prospective, non-randomized study.

N. KODAMA (JAPON)
The treatment of hand disorders with vascularized bone grafting.

P. LIVERNEAUX (PARIS – FRANCE)
Advantage of using break-away screws for distal interphalangeal joint arthrodesis of the digits.

SAMEDI 15 SEPTEMBRE 2007
SATURDAY 15, SEPTEMBER 2007

8h00 – 10h00 Divers/Recherche

S. BAROUK (BORDEAUX – FRANCE)
Evolution des techniques de correction de l'Hallux Valgus.

M. KUBO (JAPON)
The experience of the treatment of the osteochondral lesion of talar dome.

T. NAKAJIMA (JAPON)
Sensory innervation and characteristics of dorsal root ganglion innervating hip joints in rats.

K. NAITO (JAPON)
Evaluation of the effects of glucosamine on the cartilage and bone metabolism in a rat osteoarthritis model.

E. CHAU (NICE – FRANCE)
Postero medial approach in the treatment of osteochondritis dissecans of the talus.

T. INOUE (JAPON)
Operative treatment of ankle fracture.

T. HOSHI (JAPON)
Short-term results of surgical treatment for episodic patellar dislocation.

K. FUJIWARA (JAPON)
Ultrasonographic measurement of patella position in children an adolescents.

F. MASUI (JAPON)
Four cases of necrotizing fasciitis in lower extremities caused by group A haemolytic streptococcus.

H. IHARA (JAPON)
Morphological recovery of acute ACL injuries treated with conservative methods and aspirated hematoma.

J. NAKAMURA (JAPON)
Osteonecrosis associated with steroid therapy in SLE-10years of follow-up with MRI.

H. FUJII (JAPON)
Indication and limitation of Meniscectomy for over-forty years old patients : proposal of predictors of poor subjective result.

A. DURANDEAU (BORDEAUX – FRANCE)
Clear cell chondrosarcoma – 2 cases with reconstruction by total prothesis (2000 – 2007).

10h00 – 10h30 Pause

10h30 – 12h00 Hip - THA

F. LOUBIGNAC (TOULON – FRANCE)
Advantages of the bi-modular neck for the THR : Results of the first 100 HELLIANTHE® femoral stems. To at least 5-year follow-up.

J. AEBI (MONTAUBAN – FRANCE)
Egalisation de longueur des MI et PTH par voie mini-invasive.

P. HERNIGOU (PARIS – FRANCE)
The ceramic/ceramic VS ceramic/PE bearing on the controlateral hip.

P. REYNAUD (LYON – FRANCE)
Experience and indication with the dual mobility socket.

K. ODA (JAPON)
Four year results of metal on metal resurfacing total hip arthroplasty

K. KANEKO (JAPON)
La mesure de fixation initiale de prothèse cotyloïdienne « press-fit » durant l'intervention chirurgicale

H. OHASHI (JAPON)
Clinical experiences of image free hip navigation system for DDH

C. SUZUKI (JAPON)
Evaluation of total hip arthroplasty for elderly patients

JL. DORE (TOURS – FRANCE)
Voie d'abord sarcophage pour les changements de tige fémorale.

Y. HARADA (JAPON)
Failure mechanisms of Harris-Galante porous cup from analysis of retrieved implants

JL. DORE (TOURS – FRANCE)
Reprise de descellement cotyloïdien par cup métallique dans le néo cotyle à plus de 10 ans de recul, plus de 50 cas.

F. INORI (JAPON)
The relationship between THA cup setting angles and pelvic tilt

12h00 – 12h30 Conclusion - Farewell

第９回
AFJO

第９回 AFJO感想文・写真集

参加して感じたこと、思ったこと

山近記念総合病院　整形外科科長　安間基雄

最近の学会はどうしても狭い専門領域の話になりがちですが、 AFJOは股・膝・手・脊椎・外傷・基礎などがバランス良く網羅されているため、聞いているだけでも最近の各分野の傾向がつかめて私は重宝しています。もちろん日仏両国の先生方との語らいも楽しく、とくに今回 Caton先生ご自身にサンポール・ド・ヴァンスの美術館をご案内いただけたことがとても印象に残りました。私もそうでしたが、今回家族で参加する日本人の方も増え、回を増す毎に家族でのつきあいが深まっていくと一層楽しい学会になりそうです。今後とも宜しくお願い致します。

九州労災病院　井原秀俊

学会数日前、ニースの長距離バスターミナルから乗ったエズ行きのバスの中でデジカメを忘れてしまった。2時間後に、ニース行きのバスに乗ってバスターミナルに戻り、カメラを落とした旨をその運転手に伝えた。運転手は事務所まで一緒に行き、そこにも人が居ないとわかると、別の小さな事務所に連れていき、事情を話すように言ってくれた。事情を話すと携帯電話で話し出した。だめかと思っていたが、その答えは予期に反して見つかったとのこと。今回の旅の最大の旅土産となった。

白十字病院整形外科　井上敏生

日本からの発表も含め、いろいろな分野の発表が聞けてとても有意義でした。フランス人は日本人と同様に英語があまり上手ではありませんが、お互い一生懸命に伝えようとするためとても好感が持てました。ただ、よく質問されていたフランスの某先生の言葉がさっぱり聞き取れないので（皆さん聴き取りに苦労していたようですが）、この先生からは質問が来ないようにと祈りました。祈りが通じ、無事に発表を終わることができました。コートダジュールも十分に満喫できました。

山口県厚生連小郡第一総合病院整形外科　藤井裕之

この度、初めてAFJOに参加させていただきました。会場のLanval Hospital は地中海に面した絶好のロケーションにあり、7Fの会場から見渡せるコート・ダ・ジュールの景色は絵葉書さながらでした。学会は、アカデミックでありながらもとてもフレンドリーな、とても良い雰囲気でした。機会がありましたら是非また参加させていただけたらと思います。関係諸氏に感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。

京都大学大学院医学研究科・人間健康科学系専攻
運動機能開発学分野　坪山直生

ニースは初めて訪れる土地で、まさに「紺碧海岸」の名前通りの美しさに感激致しました。AFJOがなければ一生行くことはなかったかもしれません。感謝しています。ミーティングは充実した内容で、自分の専門外の分野でも大いに勉強になりました。また日頃接触することのないフランスの先生方や御家族と親しくお話しすることができてよかったと思います。運営して下さった先生方、スタッフの方々に心より御礼申し上げます。

山田赤十字病院整形外科　山川　徹

日仏の合同会議だけは、自分の中で特別扱いです。ましてや、キャトン先生が会長となれば、格別です。98年交換研修制度でキャトン先生にお世話になり、あ

の頃の思い出は夕焼け雲のように、ぽっかりと明るく暖かな色で自分の心の中に浮かんでいます。今回のニースも、良かったです。スタッフの方々、参加された皆さん本当にありがとうございました。

千葉大学大学院医学研究院整形外科学　中村順一

今回初めて日仏整形外科に参加させていただきました。韓国ソウルで行なわれたAPOA2007から駆けつけたので、かなりの強行スケジュールでした。私の演題は“Osteonecrosis associated with steroid therapy in SLE-10 years of follow-up with MRI-”で内容はSLE117例443関節をMRIで10年以上フォローした長期経過でした。仏側の発表は一味違うユニークなものが多く、ヨーロッパならではの雰囲気を味わうことができました。

東京慈恵会医科大学柏病院整形外科　増井文昭

今回、初めてAFJOに参加をさせて頂きました。初めての参加、海外での口演発表ということで非常に緊張していましたが、千葉大、原田先生、松戸市立病院、飯田先生、柏市立病院、鈴木先生など顔見知りの先生達も参加されていたこともあり安心したためか、何とか無事に発表を終えることが出来ました。学会は海沿いに面したレンバル病院で開催され、股関節、膝関節、脊椎、外傷、感染症など幅広い領域にわたりフランス側の医師達を交えて非常に和やかな雰囲気で討論が行われました。9月のニースは気候も最高で、個人的には学会に加え、観光、食事やワインの試飲など非常に楽しませて頂き、学会主催者ならびに日仏整形外科学会事務局の方々には感謝しております。来年は開催が日本とのことなので、引き続きAFJOに参加をさせて頂きたいと思いますので、今後とも宜しくお願い致します。

滋賀医科大学整形外科　児玉成人

今回ニースで開催された本学会に参加させていただきました。私がこの学会に参加したのは2年前の京都で開催されたものがはじめてで、非常に有意義な楽しい学会であったことを覚えています。今回はニースで開催されることもあり非常に楽しみでした。行程はパリに2日間滞在してからニース到着予定だったので、パリもニースもはじめての僕にとっては、不謹慎ながら旅行気分で本当に楽しみでした。この学会には同大学の久保先生、大阪の多根総合病院の本城先生も参加され同じ行程で行く予定でした。ちょうど半年前、国際手の外科学会でシドニーに行ったときは一人で、非常に寂しい思いをしたので、今回は一緒に行ける人がいて非常に心強かったです。

さて、パリに到着すると、ちょうどラグビーワールドカップのフランス大会の開催と重なっていて、町の至る所にワールドカップの旗が掲げられていました。2,3年前までラグビーをやっていた私にとってはこれは非常に魅力的でした。事前に日本で試合日程を調べましたが、微妙に行程とずれていたので、試合を観戦することができなかったのが非常に残念でした。早速、記念Tシャツを買い、ワールドカップの余韻にひたることにしました。ルーブルやエッフェル塔、凱旋門など市内を観光して、その後ニースに向かいました。

ニースにはTGVで行くことにしました。ホテルからリヨン駅まではタクシーで15分ほどなのですが、出発が遅くなり、危うく乗り遅れるところでした。結局出発の1分前に電車にかけこむこととなりました。1等車のチケットをとっていたのですが、探している余裕もなく、かけ込んだのは2等車でした。電車の中から行けると思ったら、途中でとぎれていて、1等車には行けませんでした。仕方ないので、空いてる席に座ることにしました。次の駅で1等車に乗り換えようと思ったのですが、不運にもマルセイユまで3時間ノン・ストップでした。今となっては旅のいい思い出ですが、その時はあせってました。

さて、ニースに着くとそこはまさに南国そのもので、心地よい風と青い海が爽快な気分にしてくれました。まさに癒しでした。会場のランバン病院は海側がガラス張りになっていてコートダジュールが一望できるうらやましい限りの立地条件でした。学会前にはオフィシャルツアーとガラパーティーがあり、そこでフランスの先生方や日本からの先生とも懇親を深めることが

できました。学会の内容も脊椎から上肢、基礎研究とあらゆる内容の演題があり、興味深いものもありました。日本とフランスの医療の違い、共通点などがお互いの発表を聞いているとよくわかり、新たな発見もたくさんありました。本当に有意義な学会でした。最終日はあっという間に訪れ、日本に帰るのがいやになるくらいでした。せっかくの記念だと思い、パリで買ったラグビーワールドカップの記念Tシャツを身にまとい、海岸線を約5kmばかり走りました。その時のコートダジュールは今も目に焼き付いています。A bientot!

関西医科大学附属枚方病院 整形外科　小室　元

AFJOにはじめて参加しましたが、整形外科の異文化の交流はアットホームな和やかな雰囲気のなかで時に驚かされるような発表も聞け、とても貴重な良い経験でした。昨年研修で訪れた先のCaton先生、Courpied先生とも旧交をあたためることができ、次回沖縄での再会を約束し別れました。こんな楽しい学会には今後もできる限り参加したいと思います。

西神戸医療センター　藤原正利

AFJO関係者の皆様、ニースでの開催ご苦労様でした。おかげで楽しむ事ができました。お礼申し上げます。パリでの最初のAFJOは同時通訳があり、かえって会場が混乱しましたが、現在の英語で討論する形になり交流しやすくなったと思います。1回毎に開催地を変えるのは日本側にとって都合が良いのですが、フランスの先生にはやや負担かも知れません。日仏での留学による交流は、どちらかと言えば日本の方が借りがあるようですので、なんとかフランスの先生の受け入れが増えれば良いのにと思われます。AFJOにはあまり貢献できていませんので、せめて発表し会場で質問するのが役割かなとも考えています。フランス語で交流できるようにとNOVAに通って勉強していましたが、今後どうなるのか不明ですがもう少し続けるつもりです。AFJOでしか会えない人もいますが、また会えるのを楽しみにしています。

柏市立柏病院整形外科　鈴木千穂

今回、初めてAFJOに参加させていただきました。ニースは、美しい空・どこまでも青い海・さんさんと降りそそぐ陽の光と、老後はここで暮らしたいと思えるような所でした。肝心のプレゼンテーションはさして内容もないもので、お恥ずかしい限りでしたが、ニースの地とおいしい料理とワインを堪能でき、非常に充実した日々でした。次の機会にも参加させていただければと思います。

京都府立医科大学整形外科　上島圭一郎

初めてAFJOに参加させていただきました。すばらしい気候と景色のニースで学会発表し，フランス，日本の諸先生方と交流する機会を得ることができたことが大変貴重な経験となりました。またフランスでの日仏整形の交換研修の許可を頂ましたことを役員の諸先生方に感謝いたします。今回の経験から来年のフランスでの滞在がさらに楽しみなものとなりました。

順天堂大学医学部附属静岡病院整形外科　金子和夫

人工股関節におけるプレスフィット寛骨臼カップの固定力を術中に定量的計測を行った。質問はJ. Caton先生より頂き、トルクは摩耗の異なる摺動面ではより大きくなる可能性があるのでは？という御指摘がありました。計測には安全率を考慮している由回答しました。

私達のフランス研修 1

2005年度交換研修報告

パリ遊学記

高槻赤十字病院整形外科
小 田 幸 作 先生

平成17年度日仏整形外科学会の交換研修制度で4月から7月初旬にかけてパリのCochin病院において研修を行いました。先日、平成19年9月にニースで第9回日仏整形外科学合同会議（AFJO）が開かれ、再びフランスの地を踏むことができましたが、この2年で自分のフランスに対する意識の変容と愛着を実感しました。かつて近代日本に生まれ変わるべく貪欲的にフランスに学んだ俊英の明治維新の志士たちと、浅学凡才である私との共通点をあえて見つけるならば、両者とも外国の地にきて初めて自分、そして日本を客観的に見ることができたことではなかったかと思います。実際留学してみて、フランスの歴史やその周辺諸国との関係、社会情勢を学び、世界の中の日本（日本人）ーそして自分自身を見つめるいい機会になったのではと考えています。昔から漠然と外国への留学に憧れておりましたが、手術法を学ぶのであれば本なりビデオなりで勉強した方が効率的であるかもしれませんが、留学（それが短期であっても）の意味は、外国での生活にあると確信しております。しかし、年齢が歴代留学生の中ではおそらく最高齢であり、また父の急病・手術などがあって、Cochin病院へ行く日が遅れ、フランス語の勉強や準備もままならないまま留学した為、非常に大変なものでした。病院の入り口に何とかたどり着くも、中に入ったら彷徨状態であり、偶然出会ったオペ室の師長さん、医局秘書さん等優しい女性陣にオペ室に誘導されてそこで昭和大学藤が丘病院の柁原先生（写真1）にお会いしたのでした。全く面識のないのにもかかわらず、100年の知己にあったかのようでした。その節は本当にお世話になりました。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

さて、研修制度で多くの先生方が研修されたCochin病院ですが、同病院はパリ第6大学の国立の附属病院で、パリ市内セーヌ川の南方、第五区の南端でリュクサン

●写真1

●写真2

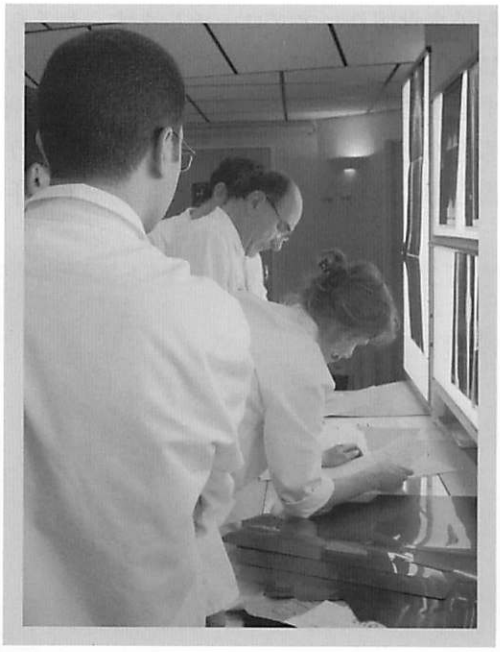
●写真3（上）・写真4（下）

ブール公園（写真2）から徒歩10分ほどの閑静な地域に位置し、年間約800件の人工股関節が行われておりました。

私の研修した整形外科はPabillion ollierという整形外科専門棟内にありました。整形外科はサービスAとBから構成され、サービスAは関節外科が中心で、Courpied教授（写真3）が主任教授、一方のBは腫瘍外科が中心でTommeno教授が主任教授でした。私はCourpied教授のサービスAで研修しました。サービスAはCourpied主任教授、Mathieu教授、Vastel先生、Hammadouche先生のスタッフ医師に加え、Chef de clinicと呼ばれる医師3人、インターン医師（日本で言う研修医でしょうか）が3人でした（写真4）。インターンは様々な諸国から勤務し、私の訪問時にはチュニジアから来ていました。

私にとって、フランス語は相当のストレスとなり、まずは語学学校へ行けということで、手術見学の後は、高額をはたいて毎日語学学校へ通いました。そこで日本人のさまざまな分野で留学研修に来ている若者と出会い楽しい経験となりました（写真5）。

●写真5（上）・写真6（下）



Nord,Parisに近いappartementに下宿して毎朝、6時半に起床し、地下鉄-RERを乗り継いで7時半につくと、朝のカンファレンス（写真6）が始まります。前日の手術症例、救急患者が学生により紹介されます。つかの間のカフェタイムの後（売店のチョコクロワッサンとエスプレッソは朝の定番でした）、手術は月曜から木曜日まで朝8時から開始されます。月曜日から木曜日は手術、金曜日には抄読会、症例検討会（写真7）などが行われます。金曜のこの抄読会の雰囲気はなかなかアカデミックであり、かつ学生も参加しての会であるためとても有意義に参加することができました。

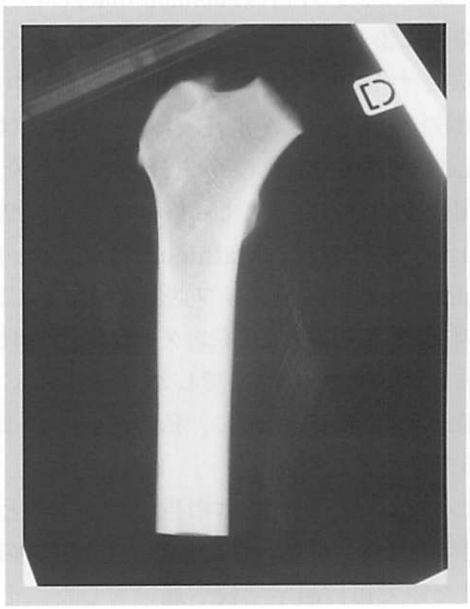
フランスの学生は、おそらく若いうちからpresentationの練習、訓練をしているのでしょう、羨望とともに彼らの議論の上手さに納得しておりました。手術は基本的に手洗いして参加できます。月曜日と水曜日の午後5時半からはスタッフミーティングとよばれる術前症例検討が行われます。症例検討会は、術前の患者をミーティングルームに呼び診察し、また麻酔医、手術室看護師、病棟看護師も参加して、総合的に手術へむけての検討を行います（写真8）。

柁原先生も報告されていますが、Cochin病院ではCharnley stemをmodifyしたケルブール人工股関節（Charnley-Marcell-Kerboull:CMK）を使用して、基本的に大転子を骨切りしアプローチします。おそらく、症例に応じて手術手技を変えるのではなく、基本の手術手技をまず確立する。revision, 高位脱臼例、感染例いかなる手術もその応用であるということなのでしょう。いずれの手術も特に難易度を感じさせずに効率よく手術される手技には感嘆しました。また、同種骨は豊富で、bone qualityの高い骨が骨頭から大腿骨1/2の大きさにいたるまで用意されてrevisionに対応ができています(写真9)。

外来では多くの患者さんの診察をみせていただきました。外来も、効率よく患者さんの診察がしやすいように脱衣してスタンバイされ（高齢の方でもモデルのように颯爽と入室されてこられます）、秘書さんが教授の述べた診療データを的確にパソコンに打ち込み、オペの日程を決め、紹介状の返事はテープに吹き込んであとで起こしておられました。

最後になりましたが、フランスでお世話になったCourpied教授、柁原先生はじめ多くの先生方、そしてこのようなすばらしい機会を与えてくださった日仏整形外科の役員の先生方、ならびに小野村名誉教授、瀬本先生、藤原先生そして3ヶ月間快く送りだしてくださった高槻赤十字病院整形外科の先生方に厚く御礼申し上げます。本当に今回の研修は私にとりすばらしい機会でありました。今後もこの交換研修制度がいつまでも続けられ、益々交流が盛んになり発展していくことを祈念いたします。日仏整形外科の役員の先生方、ならびに小野村名誉教授、瀬本先生、藤原先生そして3ヶ月間快く送りだしてくださった高槻赤十字病院整形外科の先生方に厚く御礼申し上げます。本当に今回の研修は私にとりすばらしい機会でありました。今後もこの交換研修制度がいつまでも続けられ、益々交流が盛んになり発展していくことを祈念いたします。

●写真7（上）・写真8（下）



●写真9

日仏整形外科学会日仏交換研修を終えて

国際親善総合病院
早稲田　明　生　先生

まず初めに今回の研修にあたり多くの先生方にお世話になったことを深く感謝いたします。

私は日仏整形外科学会フランス側の会長であるDr.Jaques Catonにホストとなって頂き2006年10月から3ヶ月間、臨床研修に行って参りました。研修はリヨンのClinique Emillie de Vialarで、Dr.Jaques Catonのほか Dr.David Dejour、Dr.Arnaud Godeneche、Dr.Patrick Raynaudに、Clinique St. Charles でDr.Marc Augoyard、ナンシーのCentre de Chirurgie Orthopedique A.D.R ではDr.Patrice F.Diebold、そしてモナコのInstitut Monegasque de Medecine & Chirurgie SportiveでDr.Michel Maestroと、多く先生方のもとで勉強させて頂くことができました。

当初私は、足の外科の勉強をしたいと思いこの研修に応募いたしました。それ故ホストであるDr. Catonの専門が股関節だと分かった時には足の外科の研修をあまり出来ないのではないか、という大きな不安を感じざるを得ませんでした。このため渡仏前にメールで何度か彼に足と足関節の外科を見たいということをお願いました。

10月3日研修の初日、面会の約束は8時半でした。秘書の方に案内されて入ったのは手術棟。中から一人の中年の男性が出てきました。てっきりDr. Catonだと思い自己紹介しましたが握手してくれただけで着替えが済むとすぐに手術室の中へ案内されてしまいました。そこには沢山のドクトュール達と看護師さん達がいてすでに手術が始まっていました。私は大声で"Bonjour! Medames et Messieurs!"、と言って自己紹介しましたが、手術中であったためみんなちょっとこちらを見ただけで手術が終わるまではあまり会話のない時間が過ぎていきました。この緊張した独特の雰囲気の中でどきどきしながら手術室の中を観察するのにもまた何とも言えず自分が興奮しているのを感じていました。体の大きなドクトュールが他のメンバーに指示を出しながら手術をやっていたのでおそらくこの人がDr.Catonなんだろうと思っていると、案の定、手術が終わると私のほうにやって来て手を差しのべられました。力強い握手をされそこでやっぱりその人がDr.Catonであり

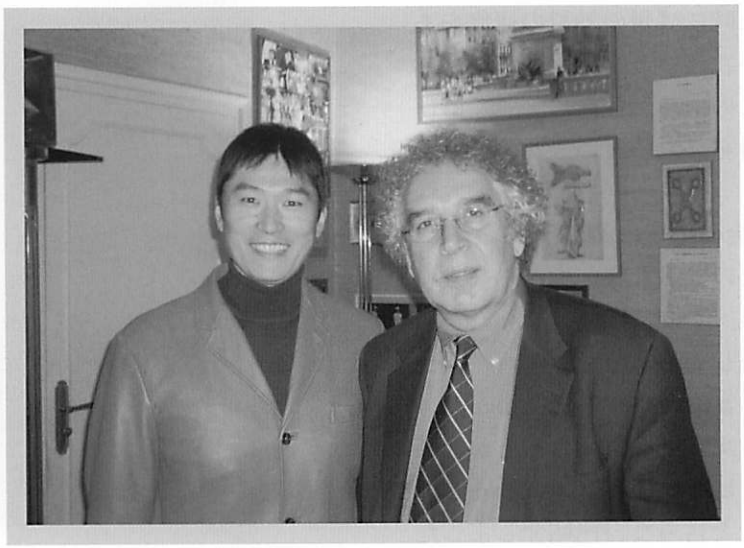
●旧市街を望む

ました。ちょっと怖そうな感じでしたがフランス語で再度自己紹介するとすごく人懐っこそうな顔をして「おまえはフランス語が話せるのか？」と言って喜んでくれたのでホッとしました。

その後、実際に研修が始まってみると足の外科のドクトュール（Dr.Reynaud）の手術は週2回のみでその他はDr.Catonの専門である股関節や膝関節、肩関節そして手の外科の見学をすることになりました。「来る前にあんなにメールしておいたのに…、もっと足の外科を中心とした見学をしたかったのになあ！」。でもこの思いは実際に研修が始まって2週間ほどすると180°変わることになりました。

私は自分の病院では大きな手術は1日に1件であとは小さな手術しか入れない、と決めていたのですが、フランスでは1日に大きな手術が何件も組まれており、どのドクトュールも非常に手際よく手術をこなしていくのには驚嘆させられました。しかも私が今までに勉強してきたものとは一味違った細かな工夫が施されているのを見て、私の専門外であるものの深く惹きつけられました。それからは自分の専門外の手術でも何か得られることがありそうで、その後は積極的に見学するようになりました。少し慣れてきてからは手洗いもさせて頂けるようになり間近に手術を見ることが出来ました。しかし、同じ手技でも日本とフランスでは大きな違いがありました。例えば手洗い一つとってもフランスでは洗った手でも準不潔として扱い手袋は基本的に2重にし、その外側の手袋も術中に何度も換えていました。更にその手でさえも術野やインプラントなどを直接触らないように鉗子を使っているのには少し驚きました。その代わり術中、術後の洗浄が少ないのには違和感を感じました。また、日本では手術は大抵別の整形外科医を助手につけ、さらに一人の手洗い看護師に一人の外回り看護師がつき手術をしていたのですがフランスでは外科医は殆んど一人きりで、助手として看護師を一人つけ手術をしておりました。しかし看護師といっても日本の看護師の役目とは大きく違っていました。例えば膝の前十字靱帯の再建術では彼（彼女）らが採取した靭帯の形成や、閉創の縫合までするのには驚かされました。

専門外の手術でも興味を持って見学するようにはなりましたが、やはり一番の目的は足の外科の勉強であることに変わりはありませんでした。Dr. Catonは私の滞在中、日本で開催されていた日仏整形外科学会に参加するため京都に行かれましたが、その間自分の知り合いの足の外科医であるDr. Augoyardに手術の見学をさせてもらえるように頼んで下さっていました。さらに彼はのちにパリで行われたフランス整形学会に私が参加出来るように配慮して下さいました。その学会では私を足の外科医として有名なDr.Maestroに紹介して頂きそちらでも研修できるように頼んでくださいました。お陰で私はモナコのInstitut Monegasque de Medecine & Chirurgie Sportiveでも研修することが出来ました。彼は外反母趾に対するScarf Osteotomyで骨切りを工夫することによりスクリューを使用せずに



● “将軍”こと我らがボス，Dr.Caton

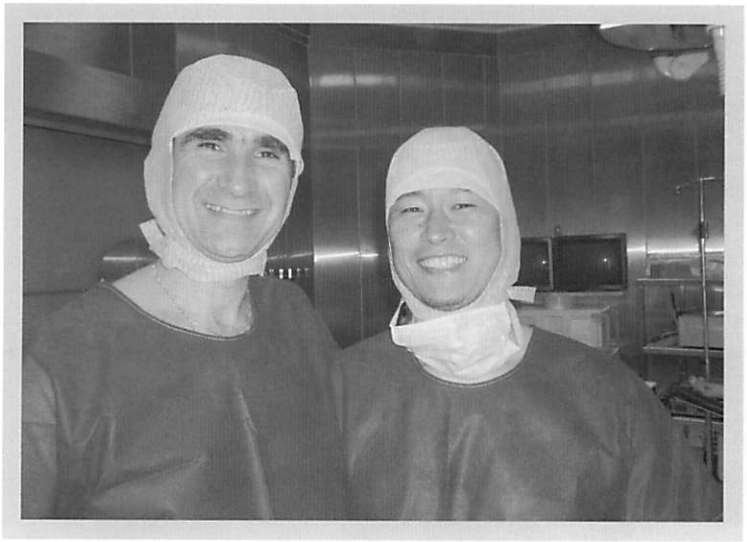
しっかりと固定する技術を見せてくれました。またDr. M.MaestroはベルギーのDr.Leemrijseを紹介して下さることになったのです。それぞれのドクトュールのところで興味深い手術を見学させて頂くことが出来ました。私は紹介していただいたドクトュール達に感謝すると同時に、人と人との出会いの大切さを改めて実感することが出来ました。

リヨンでの私の1日は朝5時半の起床から始まります。6時15分頃レジデンスを出て7時頃Cliniqueに到着。手術は7時か7時半頃から開始され15時頃に終了。月曜日は午前中に肩の手術を見学したのち午後からClinique St.CharlesでDr.Augoyardの外来を見学。火曜日は午前中に股関節と足の外科の手術を見学し午後からDr.Catonの外来を見学、水曜日は膝関節と手の外科の手術、そして木曜日はclinique St.CharlesでDr.Augoyardの、金曜日Clinique Emillie de VialarでDr.Raynaudの足の外科の手術を見学していました。外来のない日は大体16時頃終了し、外来のある火曜日と木曜日は20時から21時に終了し、帰宅は21時から22時頃、という感じでした。帰宅してからは一日勉強したことを整理して24時頃就寝し、土曜日、日曜日にはその週の復習をして関連文献を読むようにしていました。このように多くの時間勉強したのも受験の時以来ではないか、という感じでした。

Dr.Catonは前にも述べました様に身体が大きくそして手術中は少し厳しいところがあります。具体的に言うと手術中はかなり怒りっぽいところがあるのです。ある日、ほかのドクターの手術に入ると「アケオ、日本で侍の中で一番偉い人のことを何て呼ぶんだい？」と聞かれました。「将軍かな？」。「じゃあお前のボスはショーグンだ！」。「うん、なかなかぴったりかもしれない？」

だからそれ以来私は彼のことを内緒で"将軍"と呼ぶことにしました。しかし"将軍"は私にはとても優しく、親切で時々遠くで会ったときに私に向けられるウィンクは心のこもったものでした。彼は股関節形成術や大変なrevisionの手術を1日に何件もこなしたかと思えばその後遅くまで外来をされたり、私自身も1日が終わるとぐったりしていたのにDr.Catonは翌日パリに出張されたりとてもアグレッシブで、これは私も負けていられないと大いに刺激を受けました。

また、膝関節が専門のDr.Dejourは非常に元気がよく、手術中も大きな声を出して手術をされていました。私が日本からきた整形外科医だと自己紹介すると突然"コンニチハ"と挨拶してくれました。そしてその後、「アチョー」と、カンフーのような叫び声をあげながら手術をしていたのでそれは中国的であって日本的ではないことをお話しました。それでも私がいるといつもカンフーの叫びを上げて私を歓迎してくれました。だから私は彼のことを"Dr. カンフー"と呼ぶことにしたのです。Dr.カンフーは膝関節の専門で有名なドクトュールであるにも拘らず尊大なところがなく本当に多くのことを親切に教えていただきました。私は彼の前十字靱帯再建手術から足の靱帯手術へ応用するインスピレーションを得ることが出来ました。



●Dr. Dejourと手術が終わって

Clinique St. CharlesのDr.Augoyardのところに初めて行った時は本当に強い衝撃を受けました。足の専門以外のドクトュールのところで研修している時は彼らがすごい手術をしていても「自分とは違う専門だから、自分があんな風に出来なくてもしょうがないな・・・」、と自分を納得させていました。でも私と同じ専門のDr.M.Augoyardにきれいな外反母趾の手術を見せられ、さらに足のアーチや強剛母趾におけるattlageが他の足趾に及ぼす影響の話を聞かされたときは、「足の手術だけでもこんなに色々な要素を考えながら手術をしていたのか！」と、衝撃を受けると同時に、これを見るため、こうして彼らとディスカッションするために自分はフランスに来たんだと喜びを実感することが出来ました。彼は骨切りひとつとっても足のアーチのことは勿論、私が今まであまり考慮していなかった固定性や骨癒合のことまで考えて細かな工夫をして手術をしていました。私は自分の勉強不足も省みず、彼に外反母趾における第1中足骨や基節骨、他の中足骨の骨切りの仕方、そして骨切りの向きを変えることによりそれらが具体的にアーチや骨長にどのような影響を及ぼすのか、などいろいろな質問を浴びせました。彼は私の質問に丁寧に答えてくださり私が十分に理解できないでいるとさらに言葉を変え説明し直してくださいました。

11月20日からは2週間、ナンシーのDr.Dieboltのところで研修させて頂きました。彼の手術はまた非常にアグレッシブで、外反母趾のみならず偏平足や足部変形の矯正手術をされ、それも月曜日から金曜日まで毎日手術をしていました。彼は何か解らないことがあったらいつでも質問するように言って下さり、クリニックだけでなく私をホテル迄送って下さる間の車中でも質問させて頂きました。短い滞在でしたがナンシーでも多くを学び、さらに美しい街を堪能することも出来ました。

この他にも本当に多くのドクトュールにお会いし研修をさせて頂きましたが、どのドクトュールも例外なく手術中でも手技についての説明をしてくださり、また丁寧に質問にも答えてくださいました。私は彼らが本当に自分の専門分野が好きなんだと感じることが出来ました。

私は今回の研修で新しい知識を得ることが出来たのみでなく、これから手術を続けていく勇気と喜び、人と人のつながりの大切さを、まさに一生の宝を得ることが出来たと思っております。

ひとつ残念なことはせっかくフランスに3ヶ月いたのにバゲットは沢山食べたけど一人で行ったためにあまり頻回においしいレストランに行けなかったことです。"Merde！"

今回の研修にあたり多くのドクトュールにお世話になったことをあらためて感謝の意を表したいと思います。Dr.Jaques Caton、 Dr.Henri-Gatien BERTRAND、Dr.Nicola Bonin 、Dr.David Dejour、Dr.Arnaud Godeneche、Dr.Patrick Raynaud、Dr.Marc Augoyard、Dr.Patrice F.Diebold 、Dr.Michel Maestro 、Dr.Thibault Leemrijse、瀬本喜啓先生、青木清先生、坂巻豊教先生そしてKeiko Girin。

●Dr.Diebolt の手術の助手に入りました

フランスでの外傷治療の現状

高知医療センター　救命救急センター
黒　住　健　人　先生

はじめに

この度2007年8月より3ヵ月間、主に二つの病院において外傷治療を中心に研鑽を積んで参りましたので報告させていただきます。

日本からの移動

せっかくの機会ということで、小さな子供2人を含め家族4人で渡仏することと致しました。しかし帰りの飛行機の予約もできず、銀行口座に十分なお金も用意できず、パリでのアパートも未定のまま、さらには子供まで発熱し前途多難を予想させる日本出国となりました。その予想はほどなく現実のものとなりました。荷物が多かったので最初の滞在地であるMetzまでレンタカーでの移動を計画したのですが、シャルルドゴール空港の周囲の一般道は非常に複雑で、最初の宿泊地まで通常10分程度の距離の移動に2時間を要しました。何度尋ねたかわからないほど道を尋ねましたが、ほとんどの人が全くフランス語のわからない英語で話しかける私に嫌な顔をせず答えてくれました。いつまで経っても暗くならないヨーロッパの夏のおかげで何とか日のあるうちにホテルに到着しました。この後何度も道に迷うのですが、本当にどのフランス人も親切で助かりました。（後にフランスに長く住んでいる日本人に聞いたところ、フランス人は個人主義で冷たい印象があるが実は困っている人には非常に親切で、また聞かれると知らないというのがいやでそれが相まってとりあえず嘘を教える人もいるらしいとのことでした。）

Metz

さて最初の研修地はフランス北東部、ルクセンブルグとドイツの国境に近い人口15万人程度の中規模の街Metzでした。病院はCentre Hopital Regional Metz-Thionville Notre-Dame Bon-Secoursで（写真1）、ChefはDr. Christian Cunyでした。900床程度の病院で整形外科のベッドは40床程度、平均在院日数は3-4日、手術室は16室で整形外科は主に2室を自由に使っており、また整形外科専門の手術看護師が4人勤務していました。脳神経外科はありませんでしたので、そのような疾患が疑われる症例は運ばれてきませんでしたが、その他はこの地区の周囲の町からほぼ全ての患者が運ばれてきていました。整形外科は外傷外科を兼任しトーゴか

●写真1　Centre Hopital Regional Metz-Thionville Notre-Dame Bon-Secours

●写真2　カンファレンス後、整形外科の医師達と

らのレジデントなどを含め10人でした（写真2）。朝7時45分よりカンファレンスで前日や当日の手術の症例の検討を行っていました。8時より手術でほぼ毎日10例程度の手術をこなしますが、前室で麻酔をかけてから搬入され、前述の専門看護師も手慣れているため、昼過ぎにはたいてい手術が終わっていました。一人の麻酔科医師が二人の麻酔看護師を管理している形態をとっていました。天気の良い週末には交通外傷も多く、20件もの緊急手術をこなすこともありました。手術は、手伝いに入ることから始まり最終的にはいくつかの症例で執刀させて頂きました。手術後は病棟や外来を見学しておりました。

Dr. CunyはTelegraph nailという上腕骨髄内釘を世界に先駆けて開発した医師で、この時点で約1000の症例を持っており、この症例をまとめて発表するチャンスを私に与えてくれました（後述）。また週に一回のスタッフミーティングで日本や日本の病院を紹介して欲しいとのことでしたので、何とかフランス語でスライドを作り英語でプレゼンテーションさせていただきました。このことで、随分他のスタッフとも話しをする機会が増えました。

MetzにはLes Amis du Japonという親日の団体があり、私の存在を知って会長さんが病院を訪問してくれました。この町には周囲を含めて30人程度の日本人が在住していることがわかりました。そしてある週末に、ホームスティに来ている日本人などを対象としたパーティーに招かれました。その際に新聞記者の取材を受け、日本とフランスの労働環境の違いなどについて話し、そして数日後にそのことが新聞に載りました（写真3）。

週末はレンタカーで近隣の街や以前ドイツに留学していた際の大家の家を訪問したりして過ごしておりました（後にスピード違反の通知が来てしまったりしましたが、70km/hの所を77km/hで走行したもので、日本の常識は通用しないことを身をもって体験しました）。また列車に乗って近くの街や動物園行ったりもしました。この際にも、途中で道を聞いた親子連れが親切にも自分の家まで車をとりに帰り我々を動物園まで乗せて行ってくれたことがあり、日本では考えられないほどのフランス人の親切さに触れることができました。そして最終週の週末にはDr. Cunyがホームパーティーを開いてくれました。庭にプールもあり、子供達も大喜びでした。

Metz

CULTURE　cinéma　LES GENS　la france vue du japon　SOS ANIMAUX

Reprise et surprises à l'Union d'Ars

La semaine des... 102 heures

L'Empire du Soleil Levant intrigue l'environnement des Français. A leur tour, les Japonais nous trouvent parfois bizarres. L'association « Les Amis du Japon » cultivent les jardinets carrelés un jardin aux mille semeurs, soit à combien créer les conditions de rencontres franchement dépaysantes.

FORMATION

Cours d'italien à l'association Lien

A NOTER

Gymnastique avec le SMEC

Epave

●写真3　Le Republicain Lorrain, Mercredi 22 Août 2007に掲載された記事

AFJO in Nice

パリへの移動を一週間後に控えた段階でもまだ滞在先の決定しないままMetzをあとにし、第9回AFJOの開催地であるNiceに移動することとなりました。懲りもせずレンタカーの移動で、とても一日では無理なのでBeaune、Chamonixへ宿泊し、最後はイタリアを抜けてNiceへ着きました。この途中で何とかパリでのアパートが決定し、胸を撫で下ろしました。AFJOでは先に述べたMetzでの症例で発表させて頂きました（写真4）。

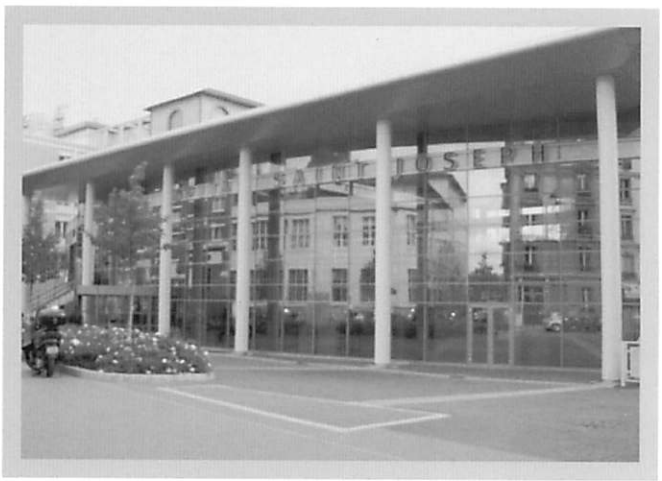
Paris

Arles、Perpignan、Limoges、Poitiersと小旅行でほぼフランスを半周しParisに到着しました。Parisについての解説は特に必要ないと思いますが、空前の日本食ブームになっていることだけ付け加えておきます（そのほとんどが中国人の店ですが）。研修先は14区にあるHopital Saint Joseph（写真5）で、ChefはDr. Barthasでした。しかし私は外傷、特にこの病院では骨盤骨折について学ぼうと思っていましたのでJudetとLetournelの弟子であるDr. Pomme Jouffroy（写真6）と共に主に行動しました。朝8時に前日の手術や前夜の急患の症例検討が始まり、8時半頃より各々手術や外来、病棟の仕事に分かれていきます。週一回月曜日夕方には翌週の予定手術の検討を行います。チュニジア、アルジェリアからの研修医、パリの医学生などがたくさんいましたが、常勤のスタッフは6人で各々の領域がはっきり分かれておりました。さらに病棟の患者を管理する総合内科医が2名おりました（彼らのおかげで外科医は病棟管理が随分楽になっているようでした）。ここでも手術は見学から始まり、途中から執刀させてもらうようになりました。病院自体は大きすぎて全体は把握できませんでしたが、整形外科の入っていた棟は血管外科と併用で手術室は6つ、整形外科、外傷外科のベッドは50床程度でした。

長く一緒に仕事をしているといろいろ愚痴を聞くチャンスもあり、病院の経営が悪くて3つの病院が提携したこと、入院ベッドが足らないこと、レントゲン技師がいい仕事をしないことなどなどどこの国でも同じような不満があることがよくわかりました（全くの余談ですが“karoshi（過労死）”がフランス語になっていました）。さらには私の滞在中にラマダンがあり、アラブ系の人たちは昼食をとらなくなったり、ある日突然研修医のストがあったりとお国柄の違いを体験しました。数日救急部も見学させてもらいましたが、パリには本当の外傷センターはないようで、制度や患者の流れは比較的日本に近いものでした。

蛇足ですが、Dr. Pomme Jouffroyは医師であり主婦であり作家でもあります。現在までに4冊の本を書いているようです。問題は、医師の仕事が忙しすぎて本を書くのに十分な時間がないことだと言っておりました。また自分の馬を持っていて週4回は乗馬をすると言っておりました。一度自宅に招いてもらい夕食をごちそうしていただきましたが、大変忙しい中にもどこか余裕があり、一年中忙しく疲弊している日本の医師とは何かが違いました。

●写真4　第9回AFJO in Niceで発表しているところ



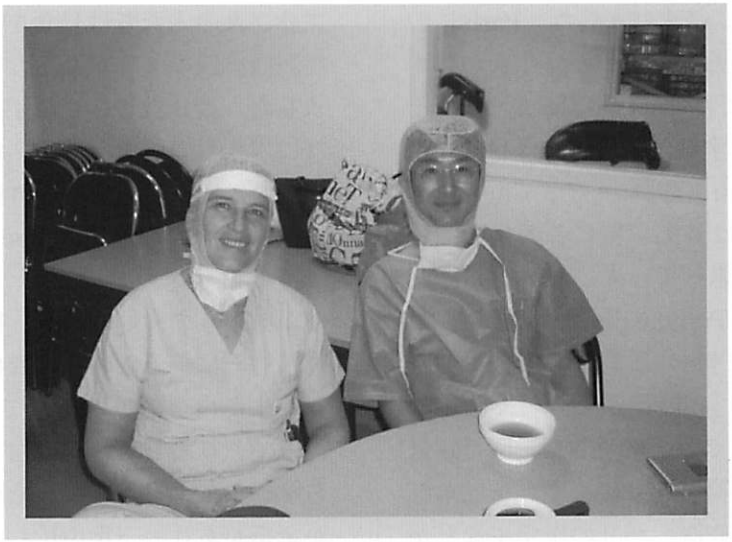
●写真5　Hopital Saint Joseph

帰路

さてこの旅は最後まで波瀾万丈でした。帰りの日はエールフランスのストに直撃しており、空港についてみると多くの人で混み合っていました。長距離便の欠航はないとのことでしたが、我々の1便前の成田行きは欠航になり現場は殺伐としておりました。あげくの果てには爆弾騒ぎで空港の外に避難させられる始末です。結局4時間半程度の遅れで関空便は出発したのでその日のうちに帰ることができました。日本到着後予定の飛行機に乗り継ぐことはできませんでしたが、もうこの段階では（日本ですし）この程度のことには全く動じなくなっていました。

最後に

滞在中は多くの在仏日本人のお世話になり、日本では話す機会の少ない異業種の人とも接触ました。ParisではAmerican Hospitalの日本人医師を訪問し、フランスと日本の医療の違いについてもお話が聞けました。このような貴重な経験をさせていただいた岡山大学の尾崎教授、留守の間ご迷惑をかけた高知医療センターの整形外科および救命センターのスタッフ、そしてこの訪問をアレンジして下さった当学会の瀬本先生、大橋先生、青木先生に深く御礼申し上げます。



●写真6　手術室の休憩室でDr. Pomme Jouffroyと

Facca先生の山形大学整形外科訪問

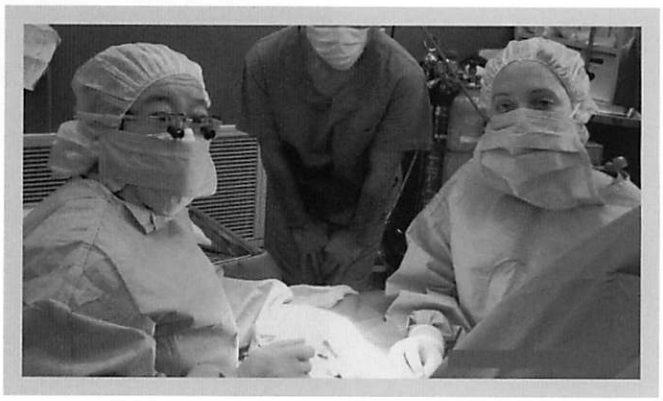
山形大学医学部整形外科教室
荻 野 利 彦 先生

今年度4月17日と1日に私どもの山形大学整形外科で第50回日本手の外科学会を山形で主催しました。外国からのゲストスピーカーに混ざって一般演題に応募されたフランスの先生がおりました。その先生はStrasbourg大学の手の外科のPhilippe Liverneaux教授でした。それに先立って日仏整形外科学会の交換研修制度でSybille Facca 先生が山形を訪れることが決まりました。私にとっては全く繋がりのない2つの話しでしたが、これら2人の先生が同じ病院の教授とお弟子さんであることが学会の間際に分かりました。お二人に最初にあったのは、4月18日の第50回日本手の外科学会評議員懇親会の時でした。Facca先生は、学会終了後最初の研修先である弘前大学に行かれ、5月6日日曜日に仙台経由で山形に戻って来ました。私と家内の2人で山形駅に迎えに行き、ホテルに案内して、翌日から2週間の山形での研修が始まりました。

手の先天異常を勉強したいという希望でしたので、典型的な例を用意しておきました。しかし、発熱などで手術が中止になりました。また、その2週間くらい前に外国の医師が手術に参加して、無資格であるという理由で医師法違反に問われた事件がありました。その様なことも加わって、彼女の手術見学や手術参加について病院長からブレーキがかかりました。折角来られたので、空いた時間は可能な限り手の先天異常についての私が講義をして彼女が聞くことにしました。ほぼ毎日1～2時間をそれに割きました。2週目の金曜日には外の病院でしたが、手洗いをして手術を見学することができました。空いた時間には教室の先生方が彼女を誘って一緒に時間を過ごし、整形外科のみならず山形や日本の文化を理解してもらうのに協力してくれました。

その1人である高原準教授が彼の奥さんとFacca先生とで食事をした時に、Facca先生が話したフランスの話がとても印象深かったので、それを何点か紹介しますとのことでした。以下がその内容です。1.フランス人は自宅にwineの部屋を持っている。2.フランス人はone dishにone wineを楽しむ。3.フランス人は1週間で約40時間以上働いてはいけない。4.フランス人はカトリックが多いので日曜日に仕事をしてはいけない。5.フランス人は日曜日には遊ぶのが忙しくて教会に行く暇がない。6.フランス人は働いて安い給料を貰うよりも、子供を産んだり、学生になるほうが豊に生活できる。私の和訳が間違っている可能性がありますので、ぜひ皆様方ご自身で確かめられることをお勧めしますと言うのが、高原準教授からの伝言です。

山形での研修の後は日本整形外科学会に出席と言うことで神戸に向かいました。



●手術室にて

日仏交換留学　当院での研修内容

京都府立医科大学整形外科
藤　原　浩　芳　先生

2007年5月28日から3週間の予定で研修をしていただきました。日本での研修施設が3つめということであり、本学での研修時には日本にはだいぶ慣れてきた様子でした。神戸で開催されていた日本整形外科学会の最終日に合流し、京都に一緒にお連れしました。

2週間は本学大学病院で手の外科の症例を中心に、残りの1週間は関連病院で外傷を中心に研修していただきました。フランスは日本と違い、外傷は大学病院に集まることが多く、非常に多数の症例をこなしていると聞き、症例数や疾患に大きな違いがあるようでした。我々も日仏の医療制度の違いをディスカッションでき、若い先生方には非常に刺激になったと思います。例えば手の外科は特に専門施設に症例が集まる傾向にあり、専門分化が日本より大分すすんでいる印象を受けました。研修期間中に教室主催の学会も開催されましたので、それにも参加していただきました。変形性関節症の保存療法の演題が多かったことが、興味深かったようです。

本学は京都という土地柄、数多くの観光名所があり、いくつかの場所には一緒に訪れ、貴重な文化交流の機会にもなりました。日本庭園とよばれる自然を再現し、緻密に構築された景色には非常に感動されたようでした。週末には久保教授と秘書たちとのフランス料理会が開催され、また最後の晩には、手の外科研究班のメンバーとともにお好み焼きを食べ、親交を深めあいました。

短期間ではありましたが、日仏整形外科学会の交換研修制度を通して、互いの医学的、文化的交流ができたことはとても有意義だったと思います。

●久保教授と秘書たちとのフランス料理会食

私達の●受け入れ体験記 3

Sybille Facca先生を迎えて

広島大学人工関節・生体材料学
安　永　裕　司　先生

ストラスブルグ大学のシビル・ファッカ先生が、日仏整形外科学会の交換研修を2007年6月1日から7月31日までのあいだ、越智光夫教授の広島大学整形外科において終了しましたので報告いたします。

この研修に当たり、受け入れ体制、宿泊およびその他のhospitalityについて越智教授にご高配いただきましたことを、学会役員の立場から、まず、お礼申し上げます。

ファッカ先生の専門は手の外科であり、上司であるリヴァノ（Philippe Leverneaux ）教授も交換研修にて1991年に広島大学を訪問されており、その縁もあって広島大学を希望されたようです。宿泊は、大学キャンパス内の広島大学医学部同窓会館である広仁会館にしていただきましたが、シビルさんには大変comfortableであったとの評価をいただきました。

手の外科の研修は、砂川　融講師と鈴木修身助教のもとで、大学病院での手術、外来診療、術前カンファレンスなどに積極的に参加していただきました。彼女は大変、気さくな性格であり他の領域のスタッフとも打ち解けて、医学のみでなく、広島の文化を十分に満喫していただけたものと思います。私も何度か食事をご一緒しましたが、彼女の食べっぷりと飲みっぷりは、極めて豪快であったことが印象深く脳裏に残っております。

私も1995年度の交換研修をさせていただきましたが、リヨンではカトン先生、カルティエ先生、コレール教授に、パリではクルピエ教授とケルブール教授にご指導いただきました。短期間ではありましたが、フランスの股関節外科、特にTHAの伝統に裏打ちされた手術手技（リヨンのnon-touch technique、コシャンのセメントTHAの手技）は、現在の私のTHAの手術手技に大きく影響を与えていると思います。

彼女は、帰国後直ちに米国のハーバード大学に短期で留学したようで、9月のニースでの日仏整形外科学会では再会できず、残念でしたが、広島での研修が、今後の彼女の手の外科医としての発展に寄与することを心からお祈りしております。将来、成長した彼女に会える日を楽しみにしております。

●医局にて、寿司パーティ。左よりシビルさん、越智教授、ドイツから見学の医学生ヨハネ君。右より下瀬医局長、私。

●外来にて手の外科スタッフと。左が砂川講師。

Breitel先生の研修報告

労働者健康福祉機構総合せき損センター整形外科
弓削　至　先生

平成19年7月1より20日まで、Damien BREITEL先生が総合せき損センターにて研修されましたので、ご報告いたします。

昨今、迷惑メールが多く自動的に外国からの不明メールがゴミ箱に入る設定になっていたため、Breitel先生からのメールを自動的に削除してしまい、彼との連絡が遅れました。何かよい方法がないものかと思案中です。さて、前回のBrice Ilharrborde先生の際にお互いの顔が分からず、博多駅で探す事に苦労したため、今回は事前にお互いの顔写真を送り合って確認しました。しかし、体格までは分からず、7月1日に福岡国際空港に向かえに行くと190cmを越えるBREITEL先生と出会い驚きました。早速、飯塚へ向かい、病院の宿舎を案内した後に私の家族と夕食をとりました。来日初の食事は焼き鳥となりました。Parisでinterneの期間を終えたばかりで、Hôpital BeaujonでChef de cliniqueのポストが約束されており、就任までの期間を利用して日本とイギリスで研修するとの事でした。また5月に結婚されたばかりで、食事の後に病院のネットですぐにフランスに連絡を取っている姿が微笑ましく思えました。

翌7月2日より本格的に研修の開始となります。初日

●カラオケ店前にて

はスタッフの紹介と病院内の案内そして、その日から腰椎後方除圧固定術のの手洗いをしてもらいました。総合せき損センター滞在中に手洗いされた手術は頚椎々弓形成術2例、腰椎部分椎弓切除術1例、腰椎後方除圧固定術7例、腰椎破裂骨折（急患）1例、胸椎硬膜内髄外腫瘍1例の計12例でした。頚椎々弓形成術に非常に興味があり、日本での文献を手に入れ、十分見学後に私と一緒に二人で1例を手術しました。頚椎後方の展開はフランスでは30例ほどしかしてないと言われていましたが、非常に綺麗で迅速な展開に驚きを隠せませんでした。また、椎弓の側溝作成でもhigh speed drillをうまく使い、手術のスキルが高い事を改めて知りました。結局C3-7棘突起縦割式椎弓形成術を92分で終わることができました（彼はその後、フランス（Hôpital Beaujon）で当センターから日仏交換研修で来仏していた益田と一緒にlaminoplastyを行ったそうです）。

スタッフとは英語で会話をしていましたが、聞き取りやすい英語で会話がはずんでいました。会話を通してフランスと日本の医療事情の違いを理解できたと思います。日本（当センター？）では外来診察から入院・放射線学的検査（ミエロや神経根ブロックなど）、手術、術後管理、術後リハビリまで一貫して1人の医師が関与しており、負担が大きいが患者には良いシステムだととの評価でした。

数年前から当センターでは職員食堂が廃止となり、外国からの留学生には自炊か外食をお願いする事になっていました。日仏交換研修の受け入れ側の条件は日本でのフランス人研修の滞在費（宿泊費・旅費）は、日本側（原則として受け入れ施設が）負担する事になっているので、食事をどのようにするかで悩みました。当センターは飯塚の町のはずれにあり自転車がないと買い物に行くにも苦労する場所にあります。病院側から6万円の補助金を頂きましたが、食費と滞在費でぎりぎりだったので、結局ほとんど毎日夕食に連れて行くことになりました。しかし、食事をしながらいろいろと楽しく会話ができました（本場のカラオケに大変感動されていました）。

7月21日に奈良へ出発となりましたが、8月11-13まで新妻をつれて再度飯塚に遊びに来てもらいました。今でも家族ぐるみに付き合いが続いています。

大変苦労しましたが、また良いフランスの友人を作ることができました。このような貴重な機会を与えてもらった日仏整形外科学会の役員の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

●スタッフ一同と

あなたも
フランス研修に！

日仏整形外料学会では、フランス整形外料学会（SOFCOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行っております。来年度の研修条件、応募条件等は次頁のとおりですのでお申し込みください。

本交換研修フログラムの趣旨は、フランスとのコネクションを持たない青年医師に留学先を紹介し、渡航費用と滞在費の一部を援助するというものです。したがって、一度フランス留学を経験しておられる先生は応募を御遠慮ください。

日本側・フランス側役員を紹介します

日本側役員

名誉会長	七川　歓次
会　長	小野村敏信
副会長	小林　　晶
書記長	瀬本　喜啓
書　記	大橋　弘嗣
	弓削　　至
	青木　　清
	藤原　憲太
幹　事	坂巻　豊教
	金子　和夫
	安永　裕司
日本側公式連結員	ジラン敬子

フランス側役員

Président	Jacques CATON (Lyon)
Vice Président et Secrétaire Général	Philippe MERLOZ (Grenoble)
Trésorier	Philippe WICART (Paris)
Membres du bureau	Philippe LIVERNEAUX (Rochefort)
	Jérôme COTTALORDA (Saint Etienne)
	Arain DURANDEAU (Bordeaux)
	Jean Pierre COURPIED (Paris)

募　集　要　項

1）募集人員　若干名（平成21年度）

2）研修条件

1．滞在期間は3か月間を原則とする。
この間はヴィザが不要であるが、これを越して滞在する場合の延長に関するすべての手続き（語学学校入学手続きやヴィザ発給のための受け入れ承諾書の依頼等）は自分ですること。
1か月単位であれば複数の施設での研修も可能である。

2．フランスでの滞在施設は、希望する研修分野等に応じてフランス側の担当委員が最も適当と思われる施設を推薦する。ただし応募者が特定施設を希望するときは申し出ることができる。
研修期間中の家族の同伴は原則として認められない。
（注意：本制度は大学の若手医師アンテルヌが病院に寝とまりしている部屋に泊まることを原則としている。滞在費用を自己負担する場合はこの限りではないが、家族への宿舎斡旋等に関して過去にさまざまなトラブルがあったため、学会として援助や斡旋は一切行わない。
特にパリにおいてはアパートの契約等に関してのトラブルが多く、貴重な滞在期間の多くを宿舎探しに費やすこともあるので、フランスに知人等がいない場合は単身のほうが望ましい）

3．費用について
　a）渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。
　b）フランス滞在中の本人の宿泊費はフランス側が負担する。
　　ただし家族を同伴する場合は、宿泊費や食費等のすべての滞在費は自己負担とする。
　c）食費およびフランス国内での移動の費用は原則として応募者の負担とする。

4．帰国後、仏語（英語でも可）と日本語での報告書の提出ならびに本会の総会での帰朝報告を行う。

5．本年度の研修開始時期は4月以降とする。

3）応募条件

1．応募者は日仏整形外科学会会員であること。
2．応募者は日本整形外科学会認定医であること。
3．原則として40才を応募年令の上限とする。
4．勤務している病院または施設の責任者の承諾のあるもの。
5．フランス語または英語を話すもの。

4）応募に必要な書類

1．日仏整形外科学会交換研修申請書
2．履歴書（大学卒業以降とする）
3．応募の動機や抱負についての小論文
4．日仏整形外科学会会員2名の推薦状―推薦者は身元保証人に準ずる者と考えること。
5．業績目録―主な発表論文5編以内（論文の別刷りは不要）
6．渡仏承諾書　a）大学の医局勤務者……教授の承諾書
　　b）病院または施設勤務者……勤務している病院または施設の責任者の承諾書
　　（大学の医局人事により出張中の者は、教授の承諾書も要す。）
以上1．以外の書式は自由であるが、すべてA4サイズに統一し、上記の順にならべて左上をホチキスで綴じること。また、コピー10部を同封すること。
7．連絡用住所シール（5枚）……希望する連絡場所を記入して上記の書類とともに返送すること。
　　連絡用住所シール（5校）あて先は～～～先生としてください。

5）選考方法

1．第1次審査は書類選考とする。書類審査の結果は平成20年7月上旬に個別に連結する。
2．書類選考に合格したものには平成20年8月上旬に大阪府済生会中津病院において面接を行う予定である。
面接の時間は個別に通知する。
3．合否は平成20年8月中旬に通知する。
4．合格者は後日改めて仏文または英文の履歴書等、フランスでの研修に必要な書類が求められる。

6）申請締め切り　平成20年6月30日必着

7）申し込み先

日仏整形外科学会事務局　　大阪府済生会中津病院整形外科内
〒530-0012　大阪市北区芝田2-10-39　大阪府済生会中津病院整形外科
Tel (06) 6372-0333　Fax (06) 6372-0339
日仏整形外科学会　　係　大橋　弘嗣

日仏整形外科学会交換研修申請書

様式2

H21-1

申請者氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 性別 ＿＿＿＿ 年齢 ＿＿＿＿ 歳

仏　　文　姓 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 名 ＿＿＿＿＿＿＿＿

生年月日 ＿＿＿＿＿＿＿＿

住　　所　〒 ＿＿＿＿＿＿＿＿

電話番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿

勤務先名 ＿＿＿＿＿＿＿＿

勤務先住所　〒 ＿＿＿＿＿＿＿＿

勤務先電話番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿ FAX ＿＿＿＿＿＿＿＿

研修を希望する専門領域 ＿＿＿＿＿＿＿＿

研修を希望するフランス側の機関（病院）があればお書き下さい。

＿＿＿＿＿＿＿＿

希望する滞在期間　平成21年＿＿月＿＿日　から　平成＿＿年＿＿月＿＿日

（本年度は4月以降から研修開始とする）

会話可能な外国語（○印をつける）

*フランス語　*英語　*その他（　　）

家族について（○印をつける）

*同伴する　*同伴しない

配偶者も医療関係者の方はその職種を書いてください

＿＿＿＿＿＿＿＿

過去に本学会の交換研修に応募歴がある方は、何年に面接を受けたかお書き下さい。

平成＿＿＿年

上記の如く日仏整形外科学会交換研修を希望し応募いたします。

平成　　年　　月　　日

氏名 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 印

フランス人研修医

受け入れのお願い

本年度も日仏整形外科学会とフランス整形外科学会（SOFCOT）との間で、青年整形外科医の交換研修を実施いたします。

受け入れ期間は原則として3ケ月間ですが、1ケ月でも2ケ月でも結構ですので、是非会員の先生方のおられる施設で、フランス人整形外科医の研修を受け入れて頂きたくお願い申しあげます。

来日するフランス人医師は、英語を話す事が条件になっております。また日仏間の旅費はSOFCOTが支給し、日本での滞在費（宿泊費・旅費）は、日本側（原則として受け入れ施設が）負担することになっております。受け入れを承諾していただける場合は、受け入れ承諾書に滞在条件等をご記入いただき、係までご送付ください。

日仏整形外科学会　会長　小野村敏信
日仏整形外科学会　交換研修係　小野村敏信
連絡先：大阪府済生会中津病院整形外科

〒530-0012　大阪市北区芝田2-10-39
TEL 06-6372-0333（お問い合わせは大橋弘嗣まで）
LU7H-OOHS@asahi-net.or.jp

様式 1

フランス整形外科医交換研修受け入れ承諾書

（日仏整形外科学会　交換研修プログラムによる）

フランス青年整形外科医を対象とした、交換研修プログラムの日本側受け入れを以下の条件のもとで承諾します。（すでに登録されている施設は、変更事項のある場合のみお送りください。）

受け入れ責任者 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

受け入れ施設名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

住　　所 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

電話番号 （　　）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

専門分野 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

受け入れ条件（該当する項目の□内にチェックして下さい）

＊受け入れ可能な期間（原則としては3カ月間です）

□3カ月間　□2カ月間　□1カ月間　□何カ月でもよい　□その他（　　）

＊受け入れ可能な時期

□　　月から　　月まで　□　　月を除く　□常時受け入れる

□その他（具体的に　　）

＊受け入れ可能な人数

□年間１人　□年間２人　□年間３人以上　□その他（　　）

□同一時期に1人　□同一時期に2人以内　□同一時期に3人以上

□その他（　　）

＊宿泊設備について

□宿泊設備を無料で利用可能

□宿泊設備を有料で利用可能（１日　　円）

□宿泊設備は備えていないがホテル等の宿泊費は支給する

□宿泊設備は備えていない。ホテル等の宿泊費も支給しない

□その他（　　）

＊食事について

□施設内で食事を用意する

□施設内で食事の準備はしないが食費を支給する

□一部施設内で食事を用意し、一部食費を支給する

□その他（　　）

＊交通費について

□交通費を支給する

□交通費は支給しない

□その他（　　）

＊その他

□日本国内の学会等への参加を援助する

□その他（　　）

以上の条件のもとに日仏整形外科学会の青年整形外科医の日仏交換プログラムの日本側受け入れ機関となることを承諾します。

平成　　年　　月　　日

受入責任者　氏名　　印

第13回日仏整形外科学会
(13ème Réunion de Société Franco-Japonaise d'Orthopédie)
開催のご案内

第13回日仏整形外科学会を下記の日程で開催いたします。シラク前仏大統領は大の親日家として知られております現在私が仕事をしております静岡の伊豆は温泉、美食、明媚な風光と三拍子そろっており、シラク前仏大統領が来日の際には伊豆にも足を運ばれました。そのようなこともあり、当初は伊豆を学会の開催地としようと考えましたが、参加される先生方のアクセスを考慮した結果、日本都市センターホテルといたしました。国会議事堂の近くで交通のアクセスはとても良く、多くの先生方に参加していただきたいと思っております。

記

【会　　期】2008年9月27日(土)

【会　　長】金子和夫 教授(順天堂大学静岡病院 整形外科)

【会　　場】日本都市センターホテル　東京都千代田区平河町

【内　　容】1. 特別講演(予定)
外傷・骨折治療　G. TAGLANG先生
小児整形外科・フランス小児整形外科の歴史　P. WICART先生
大腿骨頭壊死に対する再生医療の応用　P. HERNIGOU先生
2. 一般演題
3. 帰朝報告

【学会ホームページ】
http://www.doc-japan.com/13fjo/index.html
演題応募方法・内容詳細についてはホームページ上で掲載予定

【お問合せ】第13回日仏整形外科学会事務局
順天堂大学医学部附属静岡病院 整形外科
〒410-2295 静岡県伊豆の国市長岡1129
TEL: 055-948-3111　FAX: 055-946-0010
E-mail: junshizu-13fjo@island.dti.ne.jp

第10回日仏整形外科合同会議
(10ème Réunion de l'AFJO)
開催のご案内

【会議日時】2009年5月29日(金)～30(土)

【開催場所】沖縄

【会　　長】大橋弘嗣(大阪府済生会中津病院 整形外科部長)

日仏整形外科学会規約

総　　則

第 1 条　名称：本会は日仏整形外科学会と称する。仏名 Société Franco-Japonaise d'Orthopédie: 略称SOFJO）

第 2 条　目的：本会は日仏両国の整形外科学とその関連分野の進歩・発展に寄与し、会員相互の交流と親睦をはかることを目的とする。

第 3 条　事業：本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。
1）例会および学術集会の開催
2）仏整形外科医の招待講演の企画
3）日・仏整形外科学の情報交換と交流
4）会報の発行
5）日仏整形外科医の交換研修
6）AFJO（Association France Japon d'Orthopédie）日本部会としての諸活動
7）その他本会の目的を達成するために必要な事項

第 4 条　本会の事業年度は4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

第 5 条　本会の事務局を大阪府済生会中津病院整形外科におく。

会　　員

第 6 条　会員は正会員と賛助会員とする。

第 7 条　本会の目的に賛同し、所定の額の年会費を納める医師を正会員とする。

第 8 条　賛助会員はこの会の趣旨に賛同し、事業を援助する個人または団体とする。

第 9 条　入会希望者は年会費を添えて本会の事務局に申し込むものとする。

会　　費

第 10 条　正会員および賛助会員の年会費は別に定める。

役　　員

第 11 条　この会に次の役員をおく。
1）会長
2）副会長
3）幹事
4）書記長
5）書記

功労のあった会長経験者は名誉会長・名誉会員とすることができる。

第 12 条　会長は正会員の中から役員会において選出し、総会の承認を得るものとする。

第 13 条　役員は正会員の中から役員会において選出する。

第 14 条　会長はこの会を代表し、会務を統轄し、役員会を組織して本会の事業の執行をはかる。役員は役員会を構成し、本会の運営に関する事項を審議し、決定する。

第 15 条　会長ならびに役員の任期は3年とする。ただし、再任を妨げない。

例会及び学術集会

第 16 条　本会は年1回の例会と学術集会を開催するほか、必要に応じて講演会等を開催することができる。学術集会開催日及び会の運営は、会長に一任する。

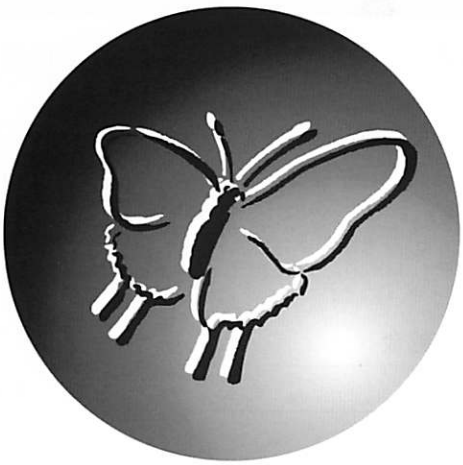
会則の改廃

第 17 条　本会の会則の改訂は役員会の議を経て総会において決定する。

付　　則

1．この会則は、2006年10月14日から施行する。

1



日仏整形外科学会ボランティアグループ
「パピヨン」
に入会しませんか

――Equipe bénévole pour la SOFJO（AFJO）――

日仏整形外科学会の活動を支えていただくために1996年4月に結成されました。

まず1996年4月13日・14日に東京で開催された第4回日仏整形外科合同会議のお手伝いをするために10数名の先生や関係の方々に登録していただき、会議の開催に協力していただきました。

今後も日仏整形外科学会の運営をお手伝いしていただける先生ならびに一般の方々にボランティアとしてご登録いただき、可能な時間にお手伝いをお願いしたいと思っております。

日仏整形外科学会の会員または会員1名の推薦を受けた方なら誰でも入会できます。

日常的な簡単な英会話ができれば、フランス語は必ずしも必要ではありません。もちろんフランス語のできる方は大歓迎です。シンボルマークは蝶のマークです。

Papillonに関するお問い合わせ、入会申込は日仏整形外科学会事務局、大橋弘嗣まで。

2

Société
Franco-Japonaise
d'Orthopédie

Welcome to So.F.J.O Homepage
ようこそ日仏整形外科学会（SOFJO）のホームページへ

日仏整形外科学会のインターネットホームページのアドレスは

http://www.sofjo.gr.jp/

です。
是非のぞいてみてください。

- 沿革
- 活動内容
  - 入会のご案内
- 役員紹介
- 共同研究
- 交換研修
- 日仏整形外科協議会（AFJO）
- 日仏整形外科学会ボランティアグループ
- 関連リンク集
- SOFJO の Top Page へ

3

平成18年度会計報告

歳入の部	（単位：円）
一般会員年会費	657,000
賛助金	780,000
広告料	1,560,000
預金利息	154
通信費等立て替え分	40,000
前年度繰越金	855,335
計	3,892,489

歳出の部	（単位：円）
日本人交換整形外科医奨学金	600,000
フランス人交換整形外科医奨学金	0
SOFJO/AFJO開催関連費	0
日仏整形外科学会関連事業（表彰など）	0
日仏共同研究、研究助成金	0
森崎仏日整形外科学用語集編纂事業	0
インターネットホームページ維持費	356,700
コンピュータ関連費	8,400
日仏整形外科学会事務局費	323,537
通信費	95,530
事務費	5,427
人件費	222,580
会議費	14,000
旅費・交通費	89,323
印刷費	750,000
雑費	1,995
出金小計	2,143,955
次年度繰越金	1,748,534
計	3,892,489

平成19年度事業費予算編成

歳入の部	（単位：円）
一般会員年会費	700,000
賛助金	1,000,000
広告料	1,000,000
預金利息	160
前年度繰越金	1,748,534
計	4,448,694

歳出の部	（単位：円）
日本人交換整形外科医奨学金 渡航費＋滞在費（一部）200,000×2名	400,000
フランス人交換整形外科医奨学金 滞在費＋交通費　100,000×2名	200,000
SOFJO/AFJO開催関連費 （第9回AFJO準備金）	1,000,000
日仏整形外科学会関連事業（表彰など）	50,000
日仏共同研究、研究助成金	300,000
森崎仏日整形外科学用語集編纂事業	50,000
インターネットホームページ維持費	400,000
コンピュータ関連費	50,000
日仏整形外科学会事務局費	350,000
通信費	150,000
事務費	50,000
人件費	150,000
会議費	50,000
旅費・交通費	200,000
印刷費	800,000
予備費	50,000
出金小計	3,900,000
次年度繰越金	548,694
計	4,448,694

4 これまでに交換研修に参加された先生方

研修年度	氏名	所属医局
1990	稲毛　昭彦	大阪医科大学
1991	三輪　　隆	帝京大学
1991	末松　典明	旭川医科大学
1992	星　　忠行	弘前大学
1992	村上　元庸	滋賀医科大学
1992	久保　俊一	京都府立医科大学
1993	小浦　　宏	岡山大学
1994	西川　真史	弘前大学
1994	岩崎　幹季	大阪大学
1995	石澤　命仁	滋賀医科大学
1995	安永　裕司	広島大学
1996	安間　基雄	順天堂大学
1996	寺門　　淳	千葉大学
1996	仁平高太郎	慶応義塾大学
1997	益田　和明	岐阜大学
1997	金子　和生	山口大学
1998	山川　　徹	三重大学
1998	岡本　雅雄	大阪医科大学
1999	清重　佳郎	山形医科大学
1999	川崎　　拓	滋賀医科大学
2000	宮本　　敬	岐阜大学
2000	藤井　一晃	弘前大学
2000	細野　　昇	大阪大学
2001	鳥飼　英久	千葉大学
2001	久我　尚之	九州大学
2002	瀧川　直秀	大阪医科大学
2002	松峯　昭彦	三重大学
2003	柁原　俊久	昭和大学藤が丘病院
2003	矢吹　有里	慶応義塾大学
2004	和田　孝彦	関西医科大学
2004	久留　隆史	広島大学
2004	小山内俊久	山形大学
2005	小田　幸作	高槻赤十字病院
2005	松尾　　篤	九州大学
2006	小室　　元	阪和住吉総合病院
2006	城戸　　顕	奈良県立医科大学
2006	早稲田明生	国際親善総合病院
2007	益田　宗彰	総合せき損センター
2007	黒住　健人	高知医療センター
2007	菊池　克久	滋賀医科大学整形外科

5 これまでにフランスから交換研修医として来られた先生方と研修施設

研修年度	氏名	研修病院名
1991	Philippe LEVEREAUX	京都府立医科大学・広島大学
1991	Luis Michel COLLET	大阪医科大学・滋賀小児センター・福岡こども病院
1992	Frederic DUBRANA	福岡整形外科病院・九州大学
1992	Marc CHASSARD	慶応義塾大学・東海大学・札幌医科大学
1994	Philippe WICART	山口大学・金沢大学
1994	Philippe RENAUX	滋賀医科大学・岡山大学
1995	Michel NINOU	大阪医科大学・新潟手の外科研究所・広島大学
1997	Bernardo Vargas BARRETO	国立小児病院・岡山大学・国立大阪病院
1997	Sylvie MERCIER	大阪医科大学
1998	Jérôme COTTALORDA	大阪医科大学・福岡県立粕屋新光園
1999	Olivier CHARROIS	滋賀医科大学・京都市立病院
1999	Eric HAVET	滋賀医科大学
2001	Laurent JACQUOT	福岡整形外科病院・慶応義塾大学・高岡整志会病院
2001	Alexandre ROCHWERGER	大阪医科大学・山形大学
2004	Brice ILHARRBORDE	総合せき損センター・大阪市立大学
2007	Damien Breitel	総合せき損センター・奈良県立医科大学
2007	Sybille Facca	弘前大学・山形大学・京都府立医科大学・広島大学

6

年会費増額のお願い

年会費は本会発足以来3000円として会員の先生方からいただき、製薬会社や器械メーカーなどからいただいた賛助金、INFOS広告寄付、バナー広告代を加えて学会の運営をしてきました。しかし昨今、製薬会社や器械メーカーの合併などによって収入が減少する一方、一人でも多くの交換研修を希望される先生のフランス留学をサポートするために財源を確保したく、2008年度から年会費を5000円にさせていただきたいと思います。ご理解とご協力をお願いいたします。

日仏整形外科学会事務局

7

賛助金を頂戴いたしました。ご協力ありがとうございました。

ジンマー株式会社
久光製薬株式会社
ビーブラウンエースクラップ株式会社
ワイス株式会社
アステラス製薬株式会社
グラクソスミスクライン株式会社
参天製薬株式会社
ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社
中外製薬株式会社
帝人ファーマ株式会社
大日本住友製薬株式会社　（順不同）

編集後記

2007年9月にはニースで第9回日仏整形外科合同会議（AFJO）が行われました。参加していただいた先生方から報告や感想をいただきました。読み返せば楽しい想い出がよみがえってくるのではないでしょうか。

交換研修報告記、そしてフランスからの交換研修を受け入れていただいた施設からの報告記はいつも生々しい内容が多く、このINFOSの中では一番楽しみな部分だと思います。今回も写真を加えて原稿をいただきました。

今年は9月27日に東京で第13回日仏整形外科学会（SOFJO）が行われます。フランスからの先生もお迎えして盛りだくさんの会になることと思います。多くの先生方のご参加をお待ちしています。また、次回の日仏整形外科合同会議（AFJO）は2009年5月29～30日に沖縄で行うことになりました。学会の詳細はホームページでお確かめください。

（係　大橋弘嗣）

エーザイの骨粗鬆症治療薬

骨粗鬆症治療剤

新発売 **アクトネル®錠17.5mg**

リセドロン酸ナトリウム水和物錠　●薬価基準収載

劇薬　指定医薬品　処方せん医薬品:注意ー医師等の処方せんにより使用すること

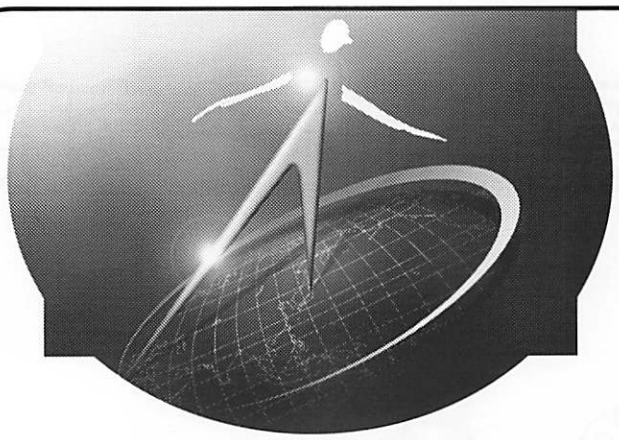
●効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については添付文書をご参照ください。

AJINOMOTO®
製造販売元：味の素株式会社
東京都中央区京橋一丁目15番1号

販売元
Eisai
エーザイ株式会社
東京都文京区小石川4-6-10

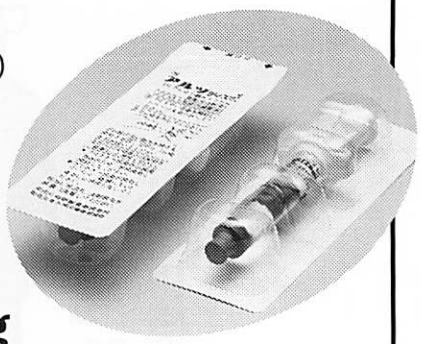
商品情報お問い合わせ先：エーザイ株式会社 お客様ホットライン室
0120-419-497　9～18時（土、日、祝日 9～17時）

ACL0705-6　2007年6月作成



ARTZ 20th Anniversary

関節機能改善剤（ヒアルロン酸ナトリウム関節内注射液）



指定医薬品　処方せん医薬品　注意－医師等の処方せんにより使用すること

アルツ®関節注25mg

指定医薬品　処方せん医薬品　注意－医師等の処方せんにより使用すること

アルツディスポ®関節注25mg

ブリスター包装内滅菌済

特許登録 ― 日本国特許第3831505号；第3845110号（医療用滅菌包装における滅菌方法）

〔製造販売元〕生化学工業株式会社
東京都千代田区丸の内1丁目6-1

ADOFEED®

経皮吸収型鎮痛消炎貼付剤

指定医薬品

アドフィード®

（フルルビプロフェン製剤）

〔製造販売元〕リードケミカル株式会社
富山市日俣77-3

●各製品の効能・効果、用法・用量、禁忌、使用上の注意等の詳細は、製品添付文書をご参照ください。
●各製品共、薬価基準収載

科研製薬株式会社

〔発売元・資料請求先〕〒113-8650 東京都文京区本駒込2丁目28-8

06P
（2006年12月作成）

2007年5月1日より 投薬期間制限が解除されました。

【禁忌】(次の患者には使用しないで下さい)
1. 本剤の成分に過敏症の既往歴のある患者
2. アスピリン喘息(非ステロイド性消炎鎮痛剤等による喘息発作の誘発)又はその既往歴のある患者
[喘息発作を誘発することがある。]

効能・効果
下記疾患並びに症状の消炎・鎮痛
変形性関節症、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛

用法・用量
1日1回、患部に貼付する。

使用上の注意
1.慎重投与(次の患者には慎重に使用すること)
気管支喘息の患者[病態を悪化させることがある。]
2.重要な基本的注意
(1)消炎鎮痛剤による治療は原因療法ではなく対症療法であることに留意すること。
(2)皮膚の感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染による炎症に対して用いる場合には適切な抗菌剤又は抗真菌剤を併用し、観察を十分行い慎重に投与すること。
(3)慢性疾患(変形性関節症等)に対し本剤を用いる場合には薬物療法以外の療法も考慮すること。また、患者の状態を十分に観察し、副作用の発現に留意すること。
3.副作用
安全性評価対象例1,075例中副作用(自他覚症状及び臨床検査値異常)の報告されたものは91例(8.5%)であった。その主なものは、そう痒(2.1%)、紅斑(1.5%)、接触性皮膚炎(1.4%)等の皮膚症状、胃不快感(0.6%)等の消化管症状、ALT(GPT)上昇(0.6%)、AST(GOT)上昇(0.5%)等の臨床検査値異常であった。〔承認時〕

	副作用の頻度		
	1～3%未満	0.5～1%未満	0.5%未満
皮膚	そう痒 紅斑 接触性皮膚炎 皮疹		
消化器		胃不快感	上腹部痛 下痢・軟便
肝臓		AST(GOT)上昇 ALT(GPT)上昇 γ-GTP上昇	

4.妊婦、産婦、授乳婦等への使用
妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には治療上の有益性が危険性を上まわると判断される場合にのみ使用すること[妊娠中の使用に関する安全性は確立していない。]
5.小児等への使用
低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児に対する安全性は確立していない(使用経験がない)。
6.適用上の注意
使用部位:
(1)損傷皮膚及び粘膜に使用しないこと。
(2)湿疹又は発疹の部位に使用しないこと。

●その他の使用上の注意等の詳細については製品添付文書をご参照ください。

経皮吸収型鎮痛・抗炎症剤 薬価基準収載

ロキソニン®パップ100mg

指定医薬品 ロキソプロフェンナトリウム水和物貼付剤

製造販売元
リードケミカル株式会社
〒930-0912 富山県富山市日俣77-3

販売元(資料請求先)
第一三共株式会社
Daichi-Sankyo
東京都中央区日本橋本町3-5-1

0704(0709)

関節機能改善剤

指定医薬品、処方せん医薬品注)

薬価基準収載

SUVENYL

スベニール® SUVENYL®

ディスポ関節注25mg
バイアル関節注25mg

ヒアルロン酸ナトリウム関節内注射液

注)注意 ー医師等の処方せんにより使用すること。

※「効能・効果」、「用法・用量」、「用法・用量に関連する使用上の注意」、「禁忌」、「使用上の注意」等については最新の添付文書をご参照ください。

http://www.chugai-pharm.co.jp

製造販売元 CHUGAI

〔資料請求先〕
中外製薬株式会社
〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1

Roche ロシュ グループ

2007.04

JMM JAPAN MEDICAL MATERIALS

KLS *System*

KLSシステムは大腿骨・上腕骨腫瘍の症例に対し、
患肢温存療法を目的として開発されたフルモジュラーシステムです。
コンポーネントは滅菌済のパーツとして常時在庫され、
症例に最適なコンポーネントが短納期で提供できます。

Modular

フィジオショルダーシステム-モジュラーステム
[医療機器承認番号:21200BZZ00292000]
フィジオショルダーシステム
[医療機器承認番号:20100BZZ00666000]
近位大腿骨モジュラーコンポーネント
[医療機器承認番号:21200BZZ00543000]
ヒンジ型人工膝関節
[医療機器承認番号:20800BZZ00543000]

日本メディカルマテリアル株式会社 大阪市淀川区宮原3丁目3-31(上村ニッセイビル9F) 〒532-0003
Tel:06-6350-1036 Fax:06-6350-5736 http://www.jmmc.jp/

東京支社 東京都新宿区西新宿2丁目4-1(新宿NSビル10F) 〒163-0810 Tel:03-5339-3645 Fax:03-3343-3097

札幌営業所 札幌市中央区北一条西3丁目3(札幌MNビル9F) 〒060-0001
Tel:011-280-6020 Fax:011-281-6525

東北営業所 仙台市青葉区大町2丁目2-10(住友生命仙台青葉通ビル6F) 〒980-0804
Tel:022-216-5176 Fax:022-216-7116

大宮営業所 さいたま市大宮区桜木町2丁目287(大宮西口大栄ビル4F) 〒330-0854
Tel:048-640-7779 Fax:048-641-5828

名古屋営業所 名古屋市東区葵3丁目15-31(住友生命千種ニュータワービル9F) 〒461-0004
Tel:052-930-1481 Fax:052-938-1377

京都営業所 京都市下京区西洞院通塩小路上ル東塩小路町608-9
(日本生命京都三哲ビル3F) 〒600-8216
Tel:075-353-4322 Fax:075-343-3118

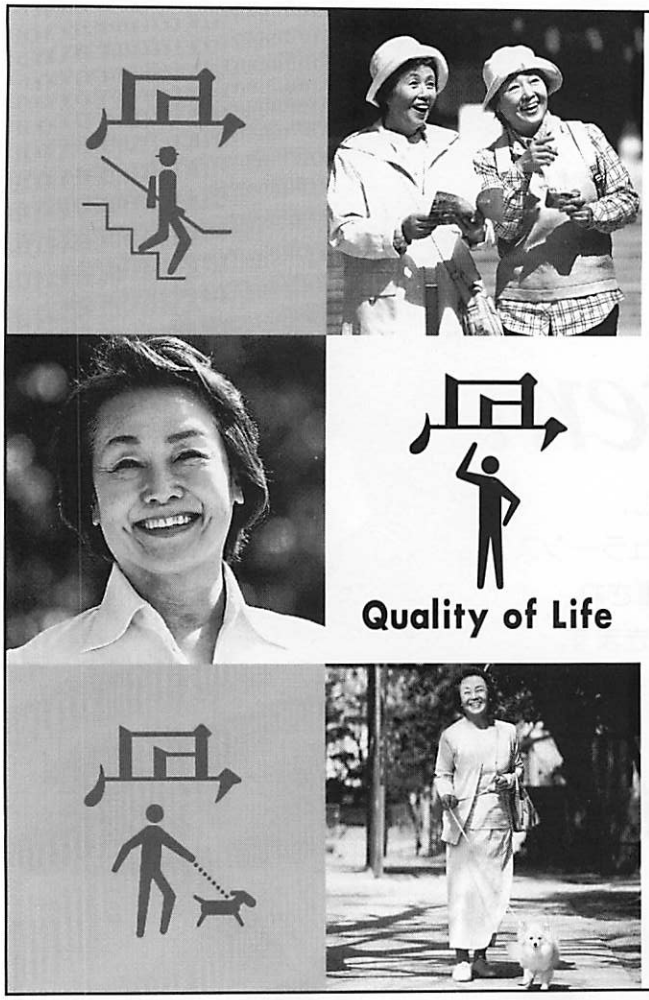
大阪営業所 大阪市淀川区宮原3丁目3-31(上村ニッセイビル8F) 〒532-0003
Tel:06-6350-1017 Fax:06-6350-8157

神戸営業所 神戸市中央区小野柄通7丁目1-1
(日本生命三宮駅前ビル8F) 〒651-0088
Tel:078-230-2531 Fax:078-230-2536

岡山営業所 岡山市磨屋町10-16(ニッセイ同和損保岡山ビル4F) 〒700-0826
Tel:086-803-3620 Fax:086-225-2289

広島営業所 広島市中区幟町13-11(明治安田生命広島幟町ビル9F) 〒730-0016
Tel:082-212-1003 Fax:082-211-3008

九州営業所 福岡市博多区博多駅東2丁目10-35(JT博多ビル7F) 〒812-0013
Tel:092-452-8140 Fax:092-452-8177



旭化成ファーマ

骨粗鬆症治療剤　薬価基準収載

エルシトニン®注20S
エルシトニン®注20Sディスポ

Elcitonin® Inj.20S　Elcitonin® Inj.20S Dispo

劇薬、指定医薬品、処方せん医薬品※　（エルカトニン注射液）

※注意ー医師等の処方せんにより使用すること。

「効能・効果」「用法・用量」「禁忌を含む使用上の注意」等、詳細については製品添付文書をご参照下さい。

製造販売元（資料請求先）
旭化成ファーマ株式会社
医薬学術統括部：東京都千代田区神田美土代町9番地1
URL http://www.asahi-kasei.co.jp/iyaku/

H18.02

薬価基準収載

胃炎・胃潰瘍治療剤　指定医薬品

ムコスタ® 錠100 顆粒20%

Mucosta®　レバミピド製剤

製造販売元
大塚製薬株式会社
東京都千代田区神田司町2-9

資料請求先
大塚製薬株式会社
信頼性保証本部　医薬情報センター
〒108-8242 東京都港区港南2-16-4
品川グランドセントラルタワー 13F

〔禁　忌（次の患者には投与しないこと）〕
本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

〔効能・効果〕及び〔用法・用量〕

〔効能・効果〕	〔用法・用量〕
胃潰瘍	通常、成人には1回レバミピドとして100mg（ムコスタ錠100：1錠、ムコスタ顆粒20%：0.5g）を1日3回、朝、夕及び就寝前に経口投与する。
下記疾患の胃粘膜病変（びらん、出血、発赤、浮腫）の改善 急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期	通常、成人には1回レバミピドとして100mg（ムコスタ錠100：1錠、ムコスタ顆粒20%：0.5g）を1日3回経口投与する。

〔使用上の注意〕 ―抜粋―

副作用

調査症例10,047例中54例（0.54%）に臨床検査値の異常を含む副作用が認められている。このうち65歳以上の高齢者3,035例では18例（0.59%）に副作用がみられた。副作用発現率、副作用の種類においても高齢者と非高齢者で差は認められなかった。（ムコスタ錠100の承認時及び再審査終了時）

以下の副作用には別途市販後に報告された自発報告を含む。

重大な副作用

1. ショック、アナフィラキシー様症状（頻度不明*）：ショック、アナフィラキシー様症状があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
2. 白血球減少（0.1%未満）、血小板減少（頻度不明*）：白血球減少、血小板減少があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
3. 肝機能障害（0.1%未満）、黄疸（頻度不明*）：AST（GOT）、ALT（GPT）、γ-GTP、AI-Pの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

*：自発報告において認められた副作用のため頻度不明。

◇その他の使用上の注意等は、製品添付文書をご参照ください。

〈'07.07作成〉

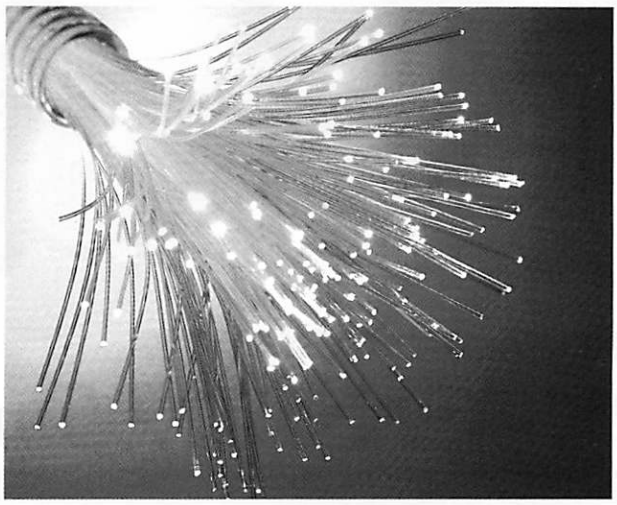
経口プロスタグランジンE1誘導体製剤

指定医薬品
処方せん医薬品(注)

オパルモン®錠5μg

リマプロスト アルファデクス錠　OPALMON®

注）注意ー医師等の処方せんにより使用すること。　薬価基準収載



●効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等、
詳細は製品添付文書をご参照ください。

資料請求先
小野薬品工業株式会社
〒541-8564 大阪市中央区久太郎町1丁目8番2号

050601

持続性癌疼痛治療剤　5 10 20 40

劇薬・麻薬・指定医薬品・処方せん医薬品(注1)

オキシコンチン®錠

5mg・10mg・20mg・40mg

オキシコドン塩酸塩徐放錠　OxyContin® Tablets

注1）注意ー医師等の処方せんにより使用すること

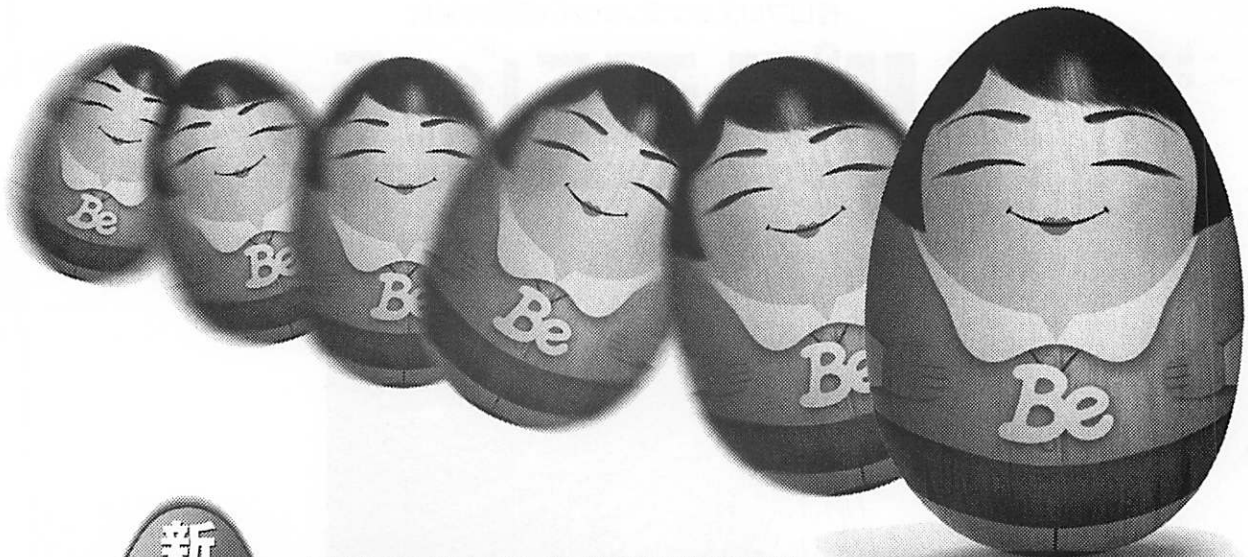
■ 薬価基準収載
■「効能・効果」,「用法・用量」,「禁忌」,「原則禁忌」,「使用上の注意」等については添付文書等をご参照下さい。

提携
ムンディファーマB.V.

製造販売元［資料請求先］
シオノギ製薬
大阪市中央区道修町3-1-8 〒541-0045
電話 0120-956-734（医薬情報センター）
http://www.shionogi.co.jp/med/

®：オキシコンチンは登録商標です。
®：OXYCONTIN is a Registered Trade Mark

2007年2月作成 A42



新発売

骨粗鬆症治療剤　劇薬・指定医薬品・処方せん医薬品注)
注)注意－医師等の処方せんにより使用すること

ベネット®錠 17.5mg

リセドロン酸ナトリウム水和物錠　薬価基準:収載

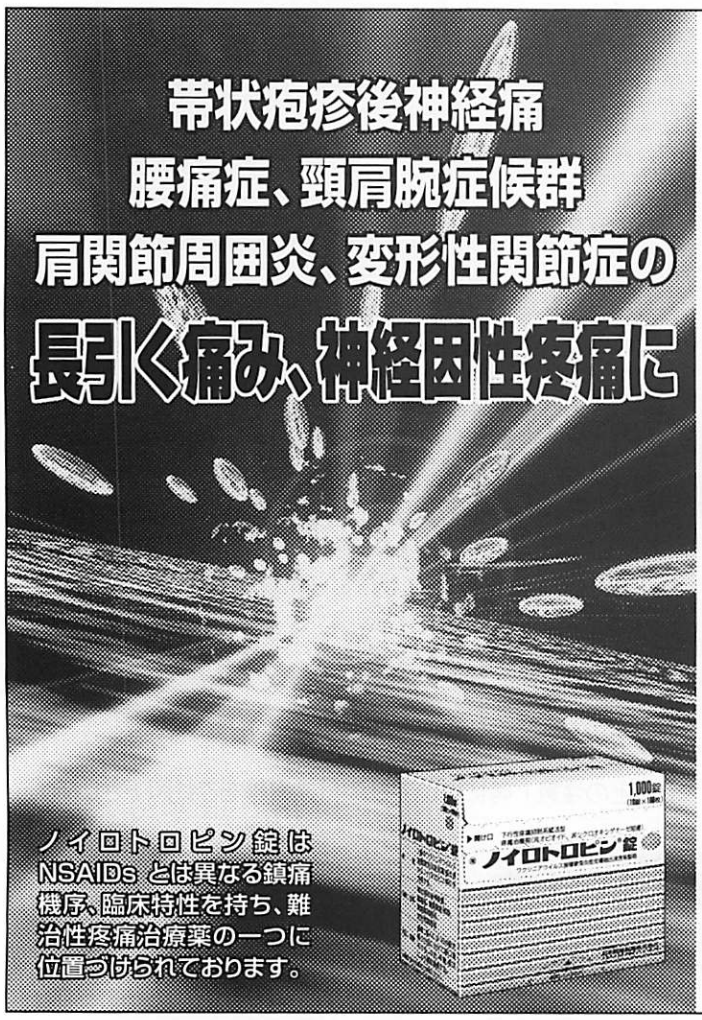
効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、
添付文書をご参照ください。

製造販売元
武田薬品工業株式会社
〒540-8645 大阪市中央区道修町四丁目1番1号
http://www.takeda.co.jp/

(資料請求先)
Wyeth
提携
ワイス株式会社
〒141-0032 東京都品川区大崎一丁目2番2号
http://www.wyeth.jp/

(0706)

帯状疱疹後神経痛
腰痛症、頸肩腕症候群
肩関節周囲炎、変形性関節症の
長引く痛み、神経因性疼痛に



ノイロトロピン錠は
NSAIDs とは異なる鎮痛
機序、臨床特性を持ち、難
治性疼痛治療薬の一つに
位置づけられております。

指定医薬品

下行性疼痛抑制系賦活型
疼痛治療剤(非オピオイド、非シクロオキシゲナーゼ阻害)

ノイロトロピン®錠

ワクシニアウイルス接種家兎炎症皮膚抽出液含有製剤
〈薬価基準収載〉

[効能・効果]
帯状疱疹後神経痛、腰痛症、頸肩腕症候群
肩関節周囲炎、変形性関節症

〈効能・効果に関連する使用上の注意〉
帯状疱疹後神経痛に用いる場合は、帯状疱疹痛発症後6ヵ月以上経過した患者を対象とすること。(帯状疱疹痛発症後6ヵ月未満の患者に対する効果は検証されていない。)

[用法・用量]
通常、成人には1日4錠を朝夕2回に分けて経口投与する。
なお、年齢、症状により適宜増減する。

〈用法・用量に関連する使用上の注意〉
帯状疱疹後神経痛に対しては、4週間で効果の認められない場合は漫然と投薬を続けないよう注意すること。

禁忌(次の患者には投与しないこと):本剤に対し過敏症の既往歴のある患者

※「使用上の注意」などについては添付文書をご参照ください。

日本臓器製薬
〒541-0046 大阪市中央区平野町2丁目1番2号 ☎06-6203-0441
資料請求先:日本臓器製薬株式会社 学術部

骨粗鬆症治療薬

フォサマック®錠35mg

Fosamac® Tablets 35mg

アレンドロン酸ナトリウム 水和物 錠

劇薬・指定医薬品・処方せん医薬品:注意ー医師等の処方せんにより使用すること

〈薬価基準収載〉

【禁忌】、【効能・効果】、【用法・用量】、【使用上の注意】等については、
製品添付文書をご参照ください。

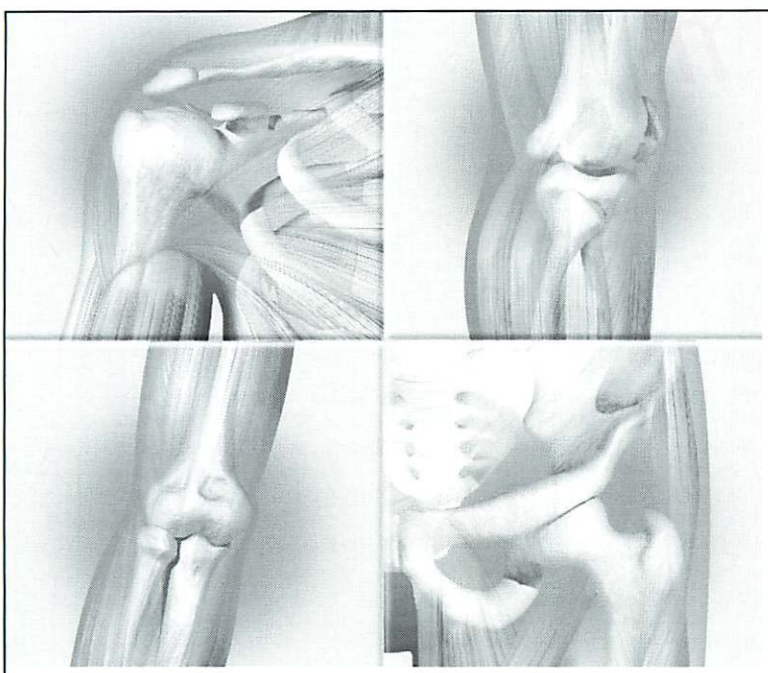
Registered trademark of Merck & Co., Inc., Whitehouse Station, N.J., U.S.A.　2007年7月作成　07-12-FSM-07-J-A07-J

製造販売元［資料請求先］

万有製薬株式会社

〒102-8667 東京都千代田区九段北1-13-12 北の丸スクエア

ホームページ http://www.banyu.co.jp/



筋・骨格系疾患の
トータルケアを目指して

ワイスは、筋・骨格系疾患のトータルケアを目指し、
有用性の高い治療薬の開発と提供、
医療関係者の方々や患者さんへの幅広い学術情報の提供など
多方面からのアプローチを『Arthro-Care』と名付け、
このコンセプトのもと、今後さまざまな活動を進めてまいります。
私たちのこれからにどうぞご期待ください。

経皮吸収型鎮痛消炎剤（無臭性） 指定医薬品
セルタッチ®
フェルビナク貼付剤　薬価基準収載

非ステロイド性鎮痛・抗炎症剤 劇薬 指定医薬品
オステラック®錠 100 200
エトドラク錠　薬価基準収載

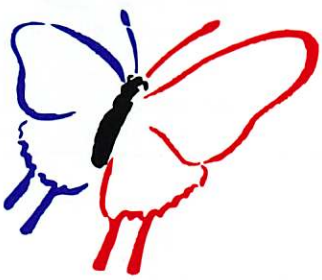
経皮吸収型鎮痛消炎剤
ナパゲルン®軟膏 ローション クリーム
フェルビナク製剤　薬価基準収載

抗リウマチ剤 劇薬 指定医薬品 処方せん医薬品注1
リウマトレックス®カプセル 2mg
メトトレキサートカプセル　薬価基準収載
注1）注意ー医師等の処方せんにより使用すること

注意 各製品の「効能・効果」、「用法・用量」、「警告・禁忌を含む使用上の注意」等については、添付文書をご参照ください。

〈資料請求先〉

Wyeth ワイス株式会社

〒141-0032 東京都品川区大崎一丁目2番2号

2007年1月作成